

143 (230)
(271)
(252)

高崎市文化財調査報告書第143集

寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡

県道金井高崎線道路建設に
伴う埋蔵文化財調査報告書

1996

高崎市教育委員会

230
252
(271)



小坂山と観音山丘陵

東から



1号祭祀跡

南から



1号祭祀跡遺物出土状況



現地説明会

序

上毛カルタにも謳われているように高崎市は関東地方と信越地域を結ぶ交通の要衝として重要な役割を果たしてまいりました。現在におきましても、北関東の交通・経済・文化の枢軸都市として大なる成長を続けております。特にここ数十年における本市の発展にはめざましいものがあり、文化的・創造的な近代都市を目指して躍進しております。

生まれかわりつつある高崎ですが、その歴史を紐解けば数千年の昔より、先人たちが慣れ親しんできた土地でもあります。古墳時代の後半には山ノ上藩に代表されるように先進的に仏教芸術がとりいれられていました。また、新しくは近世の城下町として栄え、商都としての礎を築いていったのです。

近年では開発・再開発の波の中で、埋蔵文化財の調査が頻繁に行われるようになり、先人たちの残してくれた貴重な資料の発見が相次いでおります。このような先人たちの足跡を伝達していくということは、私たちが現在を見つめ、未来を見据えていくなかで、非常に貴重な提言を与えられていることなのかもしれません。

ここに報告いたします「寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」は県道金井高崎線道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。

観音山丘陵の一角の雁行川沿いに位置する本遺跡地の調査では、当初の予想以上に数多くの遺構や遺物を発見することができました。それは縄文時代から近世までの幅広くにわたっており、同地域で重層的に歴史の積み重ねがあったことを物語っています。特に古墳時代においては、住居跡や祭祀跡等貴重な発見が相次ぎ、史実解明のための貴重な資料を提供してくれました。

最後に、発掘調査及び本報告書作成にあたり、御指導、御協力いただいた関係諸機関・関係諸氏並び地元関係者に厚く御礼申し上げます。また、猛暑の中や厳冬の中を真摯に発掘作業及び整理作業に携わっていただいた方々の労をねぎらい序といたします。

平成8年3月

高崎市教育委員会
教育長 網中正昭

例 言

○本書は、高崎土木事務所 県道金井高崎線道路建設に伴う平成5年度・6年度・7年度の埋蔵文化財発掘調査の概要をまとめたものである。

○発掘調査は高崎市教育委員会がであった。

平成5年度〈事務局〉武井洋一・神戸聖子・石田悦子・篠原伸子 〈調査担当〉黒沢元夫・小柴恵一

平成6年度〈事務局〉武井洋一・神戸聖子・石田悦子・篠原伸子 〈調査担当〉中村茂・黒沢元夫・神戸聖

平成7年度〈事務局〉神戸聖子・村井田雅明・茂原久美子・石田悦子・小林光子 〈調査担当〉黒沢元夫

○当該事業の所在地及び発掘調査の面積は下記の通りである。

〔所在地〕高崎市寺尾町字東館

〔調査期間〕5年度 発掘調査 1993年7月5日～10月27日 〈調査面積〉約4530㎡

6年度 発掘調査 1994年7月19日～1995年3月15日

7年度 発掘調査 1995年9月19日～10月17日

資料整理 1995年5月15日～1996年3月19日

○本書の執筆及び編集は黒沢が行った。遺物復元、実測、挿図作成等の諸作業は、担当者の指示のもとに、岩崎富士世・小川泉・小嶋明子・斉藤利枝子・清水和夫・高橋聡子・高林和子・武井幸子・矢島なつ美が行った。

○写真撮影については、遺構写真は黒沢・小池孝が、遺物写真は小池孝が行った。

○出土遺物・図面等は高崎市教育委員会が保管している。

○基準点測量は朝霞田調査設計に、写真測量については株式会社サイバークに、空中写真撮影については5年度は柏青高館に、6年度は株式会社サイバークに委託した。また、石材測定については、飯島静男氏に依頼した。

○発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々のご協力いただいた。(敬称略)

五十嵐信、坂本俊、田口一郎、中村正芳、若狭徹

凡 例

○土層及び出土遺物の色調呼称については、「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1990年)に従った。

○遺物実測図の縮尺は原寸、2分の1、4分の1である。

○遺物番号は各時代、各遺構ごとに通番とし、実測図・観察表・写真の各番号は一貫する。

○本書内では遺構の名称として次の略号を用いた。掘列跡についてはS A、掘立柱建物跡についてはS B、溝跡及び堀跡についてはS D、井戸跡についてはS E、祭祀跡についてはS F、礎石建物跡についてはS H、住居跡についてはS I、土坑についてはS K、道路状遺構についてはS Rである。

○遺物観察表の法量に関する項目の内、() 内の数字は推定値を、一は計測不能を表す。

○石製模造品の観察表で、祭祀グリッドは実測図内では北西を基点とした20cm四方のグリッドを表す。また、土器Noは石製模造品の入った土器実測ナンバーを表す。

○  周溝1 古墳時代の住居跡で壁際の周溝は周溝1、壁より十数cm内側の周溝を周溝2と呼ぶ。
周溝2

目 次

カラー写真

序

例言

凡例

第一章 経 緯

第一節 調査に至る経緯 7

第二節 遺跡の立地 7

1、地理的環境 7

2、歴史的環境 9

3、周辺の遺跡 10

4、市内の祭祀関連

遺物出土遺跡 12

第二章 経 過

第一節 調査の概要 13

1、調査の方法 13

2、調査の経過 14

3、基本土層の概要 15

4、検出遺構と

出土遺物の概要 15

第三章 結 果

第一節 遺 構 16

1、古墳時代 16

2、奈良平安時代 26

3、中近世 31

第二節 遺 物 32

1、古墳時代 33

2、奈良平安時代 49

3、中近世 49

4、祭祀跡出土石材 49

第三節 自然科学分析 50

第四節 まとめ 53

第五節 遺構実測図 57

第六節 遺物実測図 91

1、石器 91

2、石製模造品 91

3、鉄線・石製品 99

4、白玉 100

5、ガラス・丸玉等 107

6、土師器・須恵器 108

7、陶器・軟質陶器等 131

第七節 遺物観察表 132

1、石器 132

2、石製模造品 133

3、鉄線・石製品 134

4、ガラス玉・丸玉等 135

5、土師器・須恵器 135

6、陶器・軟質陶器等 143

第八節 写真図版 144

1、遺構写真 144

2、遺物写真 150

挿図目次

図1	周辺の遺跡図	11
図2	周辺の地形図	12
図3	調査区設定図	13
図4	基本土層柱状図	15
図5	全体図(1)	17
図6	祭祀跡全体図	19
図7	全体図(2)	27
図8・9	器種分類図	34
図10	土師器度数分布図	40
図11	白玉分類図	47
図12	塚石3柱状図	52
図13~19	祭祀跡模式図	57
図20~22	祭祀跡実測図	64
図23	7号土坑実測図	66
図24~39	古墳時代住居跡 実測図	67
図40	24号溝跡実測図	78
図41~50	奈良平安時代 住居跡実測図	78
図51・52	31号溝跡実測図	82
図53	1号溝跡実測図	83
図54	23号溝跡実測図	84
図55・56	掘立柱建物跡実測図	84
図57	櫓列跡実測図	85
図58	9号溝跡実測図	86
図59	12号溝跡	87
図60	32号堀跡実測図	88
図61・62	1・2号井戸跡実測図	88
図63・64	1号礎石建物跡実測図	89

図65	石器実測図	91
図66~74	石製模造品実測図	91
図75	鉄鏃・石製品実測図	99
図76~82	白玉実測図	101
図83	ガラス玉・丸玉等実測図	107
図84	土師器・須恵器 ~107 実測図	108
図108	陶器・軟質陶器等 ~109 実測図	131

表目次

表1	祭祀跡出土石材 分類表	50
表2	テフラ検出分析結果	52
表3	白玉の形態及び 出土別分類表	100
表4	石器観察表	132
表5	石製模造品 観察表	133
表6	鉄鏃・石製品 観察表	134
表7	ガラス玉・丸玉等観察表	135
表8~12	土師器・須恵器 観察表	135
表13	陶器・軟質陶器 観察表	143

第一章 経緯

第一節 調査に至る経緯

群馬県は乗用車の普及率が日本一である。それは山間地の多い複雑な地形を有するために公共交通手段の整備が不十分であるということに起因しているという側面が強い。したがって、基本的な交通手段として乗用車を利用している部分が多く、一世帯あたりの車の保有台数も必然的に増加する。群馬県に象徵されるように、近年、車の普及率や利用率は全国的に増加の一途を辿っている。新規道路建設及び道路幅拡張などの工事が頻繁に行われ、道路網の整備が急ピッチで進んでいるが、そのスピードに追いつかず、道路は飽和状態となり朝夕は慢性渋滞の箇所が多い。

そのような渋滞解消及び道路整備の一環として、県道金井高崎線の道路建設工事も着手する運びとなった。金井高崎線は観音山丘陵内を雁行川沿いに走行し、隣接する吉井町を抜け、甘楽町までつながる道路である。この道路は主要地方道高崎吉井線の渋滞を回避して富岡吉井方面から高崎方面への通勤コースとして利用する人たちが多い。今回の道路工事対象地は高崎吉井線からの分岐地点から、西へ約1kmに位置する県立特別養護老人ホーム高鳳園前付近までであった。現在の金井高崎線は吉井町との境界線付近まで川沿いを走行しており、幅員が5m前後の箇所が多く、車のすれ違いにはかなり困難を来す。道路建設については、現道を拡張していくには難点が多いため、老人ホームから吉井高崎線との分岐地点までをバイパスで走らすこととなった。そこは、現道よりも十数メートル上部となる丘陵の中腹付近にあたる。

調査対象地周辺では、近接する寺尾中台遺跡や鶴辺遺跡で古墳時代から奈良平安時代にかけての住居跡が検出されている。また、サンプリングを通して石器や土師器は確認されていたが、具体的な調査は行われておらず詳細については不明であった。したがって、遺構の存否を確認するためにトレンチ状の試掘調査を実施した結果、表層より50cm下層で古墳時代後期から奈良平安時代にかけての遺物が相当量出土した。

そこで事業主体者である高崎土木事務所と現地において度々なく協議を行った。寺尾地区周辺の人達を中心に早急な開通が望まれる道路ではあるが、遺跡としての重要性もあるということを理解していただいた。その結果、事業計画の調整を行い、遺構の記録保存を主とした文化財の全面的な発掘調査を実施する運びとなった。

第二節 遺跡の立地

1. 地理的環境

群馬県は関東地方の中でも、山岳地帯がもっとも多い県であり、東南部に展開する平野部は県全体の1/6以下にすぎない。県の中央付近には、妙義山・榛名山・赤城山などの上毛三山が聳え、遙か北の上越県境には三國山脈を西の信越県境には関東山地を東の栃木県境には足尾

山地及び越後山脈などの分水嶺となる山々を望望する。主な河川は泉境地帯に源を発し、山地の間を縫うようにしながら本流に合流した後は南乃至南東方向へ流下していく。高崎市の位置は平野部の北西端であり、河川が山地から平地へ流れ込む出口付近にあたる。市域の西側を鳥川と碓氷川が、東側を利根川が、中央部を榛名山を給源とする井野川が流下していく。古来よりこれらの河川は山地からの出口付近にあたる本市と深い関わりを持ってきた。河川は古来から農耕社会に多大な恵みをもたらしてきたが、反面、洪水を引き起こしたり、上流から多量の土砂を運搬し堆積させるという歴史を繰り返す中で、地形形成の上でも多大な影響を与えてきた。高崎市の地形について概観すると、台地・扇状地・丘陵地・低地に分類できよう。台地は鳥川の東側にあたる部分のほとんどを占有しており、通称前橋伊勢崎台地と呼ばれているところの一部である。最上部の層には前橋泥流や井野川泥流と呼ばれている火山性泥流が堆積している。これらは河川によって運搬されて形成されたものであり、井野川泥流については西部の鳥川沿いの崖断面で5 m以上、前橋泥流については南部で10 m以上の層厚が確認されている。台地の北と南とでは約20 m以上の比高差があり、北西から南東の方向に緩やかな傾斜を示している。扇状地は北部の一端に認められており、火山性泥流堆積物により構成されている。榛名山の噴火に伴う火山砕屑物が、雨水等の影響を受けながら洪水や土石流として長年の間の下流へ土砂を繰り返してきた結果できあがったものであり、相馬ヶ原扇状地と呼ばれている。低地は主に鳥川・碓氷川・井野川の旧記原乃至旧流路にあたる場所である。井野川は下流で二段の河岸段丘を形成しており、下位段丘面とは4～5 mの比高差がある。鳥川の低地はほとんどが右岸に占有されており、河川面との比高差は1～2 mである。左岸は前橋高崎台地と比高差約5 m以上の急崖により境界を画している。丘陵地は標高200 m～250 mの低丘陵地であり、市域の西側に展開している。観音山(岩野谷)丘陵と呼ばれている碓氷川・鳥川・錦川に囲まれた地域であり、高崎市のみに限らず安中市、富岡市、吉井町、松井田町、下仁田町域まで広がりをみせる。

丘陵地の地形を高崎城周辺に絞ると、徹底的には丘陵内を流れる雁行川や荒久沢、寺沢川などの主だった小河川は東方に流下し、鳥川乃至碓氷川に合流している。これらの河川による開折は顕著であり、至る所に複雑に変化に富んだ地形を形成している。また、この河川には小支谷や浸食谷が無数に流れ込んでおり、丘陵の奥部まで下向浸食は進行している。丘陵も中腹から上部にかけては、大平台、上ノ平、中台、館台、上の台などの地名にもあるように小規模な棚状乃至緩傾斜な地形を随所に確認できる。これらの地域は、主に畑に利用されていたが、宅地開発の波に乗り住宅地に造成されたり、造成を予定しているところが多い。

本遺跡は、「上野国片岡群誌」によるところの旧片岡群寺尾村に属しており、現在の寺尾町館に所在する。館という地名は、低い台地の先端あるいは先端を意味していると言われており、

この地が観音山丘陵の東端に位置してことと深い関係がありそうである。館地区は雁行川及び品川沿いに関けた集落である。雁行川は鳥川に流れ込む河川の中で最も長流であり、源流は吉井町域に発する。雁行川による開折は上流と下流とでは異相を呈しており、上流では急峻なV字谷を形成するが、館地区付近に到達すると下向浸食は緩やかになる。館地区でも雁行川を境として南と北とでは地形は異なっており、南では20 m以上の急崖上に緩傾斜な地面を形成しているが、北は2段から3段を形成する段丘面が確認できる。本遺跡は最上位の段丘面上に位置しており、最下段丘面との低位と10 m以上の比高差があり、標高約110 mである。この段丘面は幅約20 m・長さ270 m以上の広がりをみせており、西は支谷に東は円錐形を呈す小坂山によって画されている。段丘内では南北に横断するかのよう小さな沢が数十メートル間隔で雁行川に流れ込んでいる。

2. 歴史的環境

旧石器時代については少神山台遺跡で柳葉形と木葉形の槍先形尖頭器が各1点出土している。同時期の石器は市内全域をみわたすと、そのほかに南直達跡・岩鼻坂上北遺跡・元島瓦片遺跡などでも出土しているが、単一であり、出土状況も不確定要素が多い。縄文時代に入ると、生活域は広がりをみせたと思われ、台地状地形の中に遺跡の検出例が増えていく。下中居条里遺跡の調査では、水田地帯の近域にある敷高地で中期加曽利E式期の住居跡が検出されており、平地まで活動域が拡大していったことを証明している。観音山丘陵においても北西に位置する大平台台遺跡で前期から中期にかけての住居跡が確認されている。また隣接する少神山台遺跡では早期の茅山層式から晩期にかけて土器や石器が出土しており、生活の適応域であったことがわかる。その中でも前期の黒浜式では、盛期期であったことを示すかのよう数百点の土器が出土している。弥生時代になると碓氷川を隔てた対岸の八幡台地に住居跡を数多く検出する。特に、引間遺跡では35軒の住居跡を、八幡遺跡では57軒の住居跡と周溝墓が確認されており、この台地上に一大集落の営まれていたことがわかる。同様に鳥川対岸の前橋伊勢崎台地上の敷高地では中期後半栗式土器の出土した竜見町遺跡や鏡馬場遺跡及び後期埴形式土器の出土した城南小校庭遺跡などが知られている。少神山台遺跡では後期の住居跡が32軒、礎床墓跡が9基調査されており、北縁にも礎床墓が検出されていることから分布範囲は拡大するものと思われる。また本遺跡の北西3.1 kmに位置する乗船遺跡は御部入古墳群と重複しており、宅地造成に伴う古墳群を主眼とした調査の中で後期埴形式土器が14軒以上確認された。古墳調査のために入れたトレンチ内で確認されたものであり全容を解明までには至っていない。古墳時代前期の遺跡は前橋伊勢崎台地を貫流する井野川周辺の自然堤防及び敷高地上に多く確認でき、観音山丘陵内においては大平台台遺跡で方形周溝墓2基が近接して検出されている。5世紀に入ると前半では東へ約4 kmの鳥川左岸に首長墓となる大型前方後円墳の浅間山古墳と大鶴巻

古墳が出現する。後半期になると丘陵内での遺構の検出例が増えてきており、少林山台遺跡の3号墳はB種コホケを施した墳丘径約20mの円墳である。同様に後半に比定されている三島塚古墳は墳丘径50m以上的大型円墳であり、寺尾・石原・片岡町周辺一帯の首長墓の様相を色濃く残す。また、1.5km南西に位置する姥山古墳では凝灰岩製の割竹形石棺が約10個露出している。6世紀代では少林山台遺跡で初頭から後半にかけて11基余りの古墳が築造されており、2号墳から出土した円筒埴輪にはヘラ記号が施されていた。石原稲荷山古墳では銅鏡や馬具などが横穴式石室内から出土している。南東5.2kmの地点にある山名古墳群内では山名原口1遺跡及び山名原口II遺跡でそれぞれ墳丘径が20m前後の小円墳が調査されている。隣接する土合地区では1号墳から5号墳までが調査されており、1号墳の墳丘周辺には埴輪男子像をはじめ相当量の埴輪が散布していた。南に位置する谷を二つ隔てた鶴辺田地や農大二高等が占地している南東の緩傾斜な丘陵地上には板塚古墳をはじめ数基が残存しているのみであるが、上毛古墳群によると約30基の古墳が記載されている。御部入古墳群は6世紀中葉から8世紀初頭にかけての古墳が20基前後確認されており、群集墳の典型的な資料として注目を集めてきた。7世紀以降としては山ノ上古墳や山ノ上西古墳があるが、山ノ上古墳は西に隣接する山ノ上碑との関連を考えていくうえで貴重な資料である。集落については、古墳の盛行してくる時期に比例して増加傾向が窺える。板塚古墳と同丘陵地上にある鶴辺田遺跡では鶴辺田地造成時の整地作業で5世紀から6世紀にかけての多量の土器片とともに、住居跡が確認されており、当該期集落の存在を想定させる。寺尾中台遺跡では6世紀の住居跡が60軒余り検出されている。また、寺尾東館遺跡の対岸となる雁行右岸の緩傾斜地の館台や左近屋敷跡（通称）では試掘調査やサンプリングを通して6世紀の土器が確認されている。5世紀末から6世紀にかけて丘陵地や沢沿いの緩傾斜地へ人々の移動あるいは、かなりの入植のあったことが想定される。

奈良平安時代の集落としては、烏川を隔てた対岸の下佐野遺跡で大集落が知られているが、寺尾中台遺跡でも当該期の住居跡や遺物が確認されている。また、烏川と鍋川が合流する氈蓋原上の山名戸矢遺跡では8～11世紀にかけての住居跡が果々と検出されている。乗附庵寺は出土瓦から奈良時代から平安時代初頭頃と考えられるが、詳細な調査が実施されていないため概要については不明である。中世では丘陵内に南北朝以降の山城や館址が盛んに築城されたようである。北から乗附城、寺尾中城、寺尾茶臼山城、根古屋城、山名城などである。調査区周辺でも左藤屋敷跡や左近屋敷跡など館址関連の遺構を確認できる。

3、周辺の遺跡

- ①寺尾東館遺跡②虚空蔵山古墳③神明塚古墳④御部入古墳群⑤蛇塚古墳⑥乗附庵寺
⑦高崎市109号古墳⑧浅間山古墳⑨高崎市208号古墳⑩順政神社古墳⑪小祝神社
⑫石原稲荷山古墳⑬天王家古墳⑭千人塚古墳⑮坊主山古墳⑯三島塚古墳⑰石原坂田遺跡

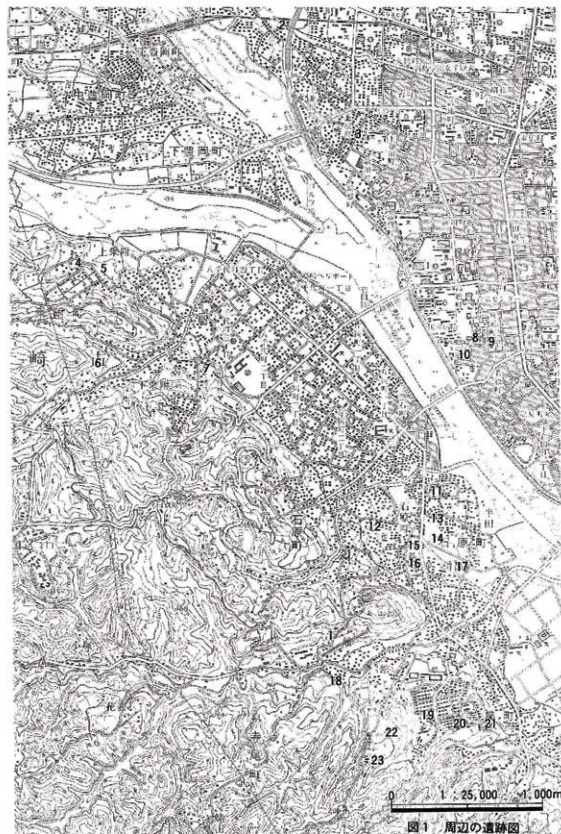


図1 周辺の遺跡図

⑬試掘H6-54⑭石原鶴辺印地遺跡⑮鶴辺遺跡⑯塚塚古墳⑰寺尾中台遺跡⑱姥山古墳

4. 市内の祭祀関連遺物出土遺跡

- | | | | |
|--------------------|-------------|-----------|----------|
| ①寺尾東館遺跡 | ②小八木遺跡 | ③井野川遺跡 | ④下小島遺跡 |
| ⑤八幡中原遺跡 | ⑥大島原遺跡 | ⑦鶴辺遺跡 | ⑧下佐野II遺跡 |
| ⑨上滝遺跡 | ⑩戸田貝戸遺跡 | ⑪御布呂I遺跡 | ⑫八幡遺跡 |
| ⑬上並榎屋敷前遺跡 | ⑭上中居辻薬師II遺跡 | ⑮稲荷町I遺跡 | ⑯並榎台原遺跡 |
| ⑰西島相ノ沢遺跡 | ⑱大瀬柳原遺跡 | ⑲新保田中村前遺跡 | ⑳田端遺跡 |
| ㉑舟橋遺跡 | ㉒熊野堂遺跡 | ㉓上並榎南遺跡 | ㉔榎米前遺跡 |
| ㉕貝沢I遺跡 | | | |
| ㉖高崎城VII・IX高崎城三ノ丸遺跡 | ㉗西島遺跡 | ㉘正観寺遺跡 | ㉙寺尾中台遺跡 |

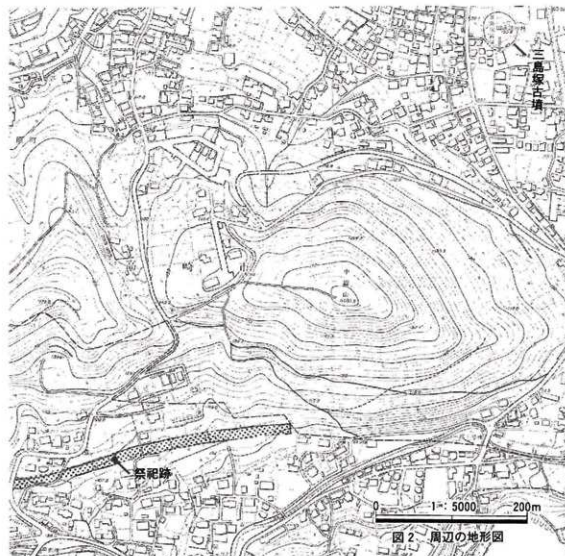


図2 周辺の地形図

第二章 経 過

第一節 調査の概要

1. 調査の方法

調査は平成5年度から7年度までの3ヶ年に渡り、西から東へ向けて順次実施していった。調査にあたっては、まず、掘削重機の移動方法及び土砂置き場について考慮した。調査区が幅員10m前後と狭いうえに傾斜角が6〜7度を示しており、安全面と調査の円滑化という点で最良の方法が何かを模索した。土砂置き場については、周辺に十分な借地を確保できなかったために、調査区内を何区画かに分割し反転しながら土砂の移動を行った。その時の運搬手段として、走行運搬の安定性という点から主に4tクローラダンプを利用した。土砂は緩傾斜な低い土山を築かせておいたが、雨水等による土砂の流出を防止するため、掘削終了後はシートを被せておいた。

遺構の検出にあたっては、粘質性の灰褐色土を遺構確認面とした。基本的には1面調査であり、深度については傾斜のうえに起伏に富むため一律でないが、50〜80cmである。

基準点については、国土座標Ⅱ系に従って、調査区域北西隅のX=33520, Y=-74170を基点としたグリッドを設定した。調査用グリッドは10mを1単位としたメッシュを組み、補助的に5mグリッドも設定した。グリッドの名称は、北西の交点の名称をあてることとし、その呼称については、北から南へはアルファベットを、西から東へは算用数字を標記することとした。遺構測量については、全体平面図は40分の1で、各遺構ごとの平面図・セクション図・エレベーション図については20分の1か10分の1で測量した。写真の記録は、全体写真についてはバルーン及びリゾジョンヘリにより撮影し、各遺構ごとの写真については、モノクロとリバーサルを併用しながら撮影した。

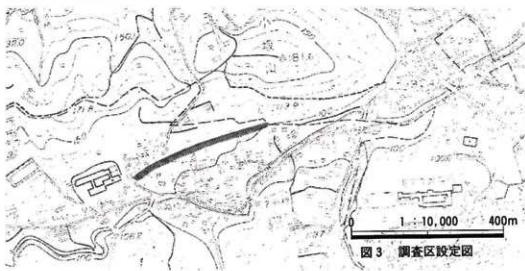


図3 調査区設定図

2. 調査の経過

平成5年度

- 6月中旬 発掘調査を開始するに際し高崎土木事務所職員と事前協議。
- 6月下旬 仮設建物の設置。
- 7月上旬 水道管の敷設及び仮設電柱の設置。発掘資材の搬入。
- 7月6日 1区の発掘調査を開始。重機による表土掘削。
- 7月13日 遺構精査・確認作業を開始。
- 8月4日 中世溝検出。
- 8月12日 図面測量（エレベーション及びセクション図）を開始。
- 8月17日 古墳・奈良住居跡及び祭祀遺構（平面図）を開始。
- 9月6日 1区の写真撮影及び2区の発掘調査開始。
- 9月10日 遺構精査・確認作業を開始。
- 9月25日 2区の図面測量及び写真撮影を開始。
- 10月16日 空中写真撮影実施。
- 10月25日 写真撮影及び図面測量終了。
- 10月27日 埋め戻し終了。
- 10月28日～ 整理作業（遺物洗浄、注記、復元など）を断続的に行う。

平成6年度

- 7月中旬 高崎土木事務所職員と事前協議。
- 7月19日 発掘調査予定地の整地。仮設建物の設置。
- 7月20日 3区の発掘調査を開始。重機による表土掘削。
- 7月22日 発掘資材の搬入。
- 8月2日 遺構精査・確認作業を開始。
- 8月3日 古墳時代住居跡及び祭祀遺構、奈良時代住居跡、礎石建物跡を検出。
- 8月10日 図面測量および写真撮影開始。
- 8月26日 祭祀遺構の写真測量を実施。
- 8月30日 4区の発掘調査を開始。重機による表土掘削。

- 9月9日 4区の遺構精査・確認作業を開始。古墳時代住居跡・平安時代溝跡を検出。
- 9月21日 図面測量及び写真撮影開始。
- 10月18日 古墳時代溝及び中世溝を検出。
- 11月10日 空中写真撮影。2区写真撮影及び図面測量終了。
- 11月12日 現地説明会。
- 11月18日 4区の埋め戻し及び5区の掘削開始。
- 11月29日 5区の遺構精査・確認作業を開始。
- 12月1日 古墳時代住居跡・奈良時代溝・中世溝を検出。
- 平成7年
- 1月9日 古墳時代住居跡及び祭祀遺構は引き続き調査。
- 1月23日 祭祀遺構以外は、写真撮影・図面測量すべて終了。
- 1月24日 埋め戻し開始。祭祀遺構は引き続き調査。
- 3月15日 発掘調査終了
- 平成7年度
- 発掘調査
- 9月上旬 調査予定地に林立している樹木の伐採。
- 9月18日 仮設建物の設置。発掘資材の搬入。
- 9月19日 6・7区の発掘調査開始。重機による表土掘削。
- 9月20日 遺構精査・確認作業を開始。
- 9月28日 奈良平安時代住居跡・近世道路状遺構を検出。
- 10月3日 図面測量開始。
- 10月16日 埋め戻し開始。図面測量及び写真撮影終了。
- 10月18日 発掘調査終了。
- 整理調査
- 5月中旬 5年度乃至6年度の遺物注記・接合・実測。
- 8月上旬 遺構図面整理。
- 10月中旬 遺構及び遺物トレース。写真撮影。
- 10月下旬 7年度調査で出土した遺物の洗浄、注記。
- 11月上旬 写真の整理。
- 12月上旬～ 報告書刊行のための仕上げ作業。

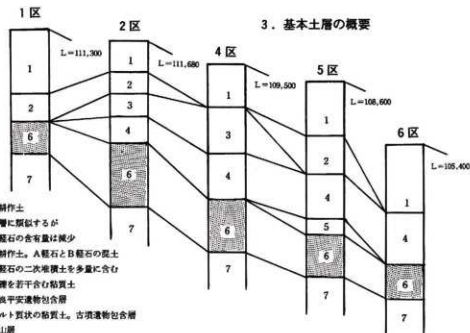


図4 基本土層柱状図

西から東へ向かうにしたがい、段丘面が東北東方向へ推移していくのに対し、道路建設予定地はほぼ東へ走行していくことになる。したがって、東へ漸移していくにつれてレベルは低くなっており、1区と7区の上層の基本レベルは約6mの標高差が確認できる。尚、本遺跡の地山層と捉えた灰黄色の粘質土は1次降下のローム層ではなく、洪水による堆積層と考えられる（注1）中村正方式の表示による

4. 検出遺構と出土遺物の概要

明確に遺構として確認できたものは、古墳時代から近世までである。古墳時代については前期や中期は確認できずすべて後期である。検出された遺構の総数は祭祀跡2基、住居跡32軒、堀及び溝33条、掘立柱建物跡5軒、櫓状跡3条、井戸跡2基、礎石建物跡1棟、道路状遺構2条、土坑14基などである。内訳は古墳時代（祭祀跡2基・住居跡16軒・溝跡2条・土坑1基）、奈良平安時代（住居跡15件、溝跡6条）、中近世（掘立柱建物跡5軒、櫓状跡3条、溝乃至掘跡20条・井戸跡2基・礎石建物跡1棟・道路状遺構2条・土坑13基）となる。ピットが全体で60基弱検出されているが、ほとんどが中世のものである。そのほかの遺構については、現存状況が良好でないうえ遺物も出土しておらず、時期については不明であった。遺物については、縄文時代から近世までにわたり幅広く出土しているが、弥生時代や古墳時代前期・中期については空白の期間のようにまったく出土がみられない。縄文時代についても、石斧や剥片石器が数点確認できるのみであり、遺物の出土量が急激に増加してくるのは古墳時代後期からであり、10世紀後半以降になると突然絶えてしまう。

第三章 結 果

第一節 遺構

1、古墳時代

1号祭祀跡

祭祀跡は緩傾斜な段丘面に立地しており、丁度下段の段丘と東側の支谷地への変換点に位置する。段丘面の傾斜角は東西方向が3～4度、南北方向が4～7度であるが、変換点であるため微視的には祭祀跡の検出地点は若干急な様相を呈する。規模については、後世の自然及び人為的な影響を多大に被っており、推定域となるが東西幅1.8m・南北幅2.0mである。土坑状の掘り込みや土壇状の高まりは確認できなかった。セクション・エレベーション等の断面の様相から傾斜面を若干削平していたと思われるが、明瞭にその範囲はとらえきれない。その際に設置する遺物の安定性をはかるため遺構内表面を5～10cmの深さで全体的に掘り起こしたかあるいは土器の周囲を土盛りしていった可能性が高い。遺跡地の土質は粘質性が強く、乾燥するとかなり堅緻になる。土器の設置に際しては、地形面に何らかの工作を施さないと安定して据え付けることは不可能である。また、遺構が検出された地点は傾斜地であるため現状地形にそのまま設置していくことは困難である。土器を取り上げた痕跡から明らかに設置面への整地が成されたことは、容易に想定できる。窪みの深いものは10cm以上あり、土質からそれほど窪むとは考えられず、また土丘の方向等から鑑みても人為的な工作の様相を色濃く残している。水平面からの遺物の状況については、割れてしまっているものが多く、当時の配列を再現することとは不可能である。特に大型の甕・壺等については、完形なものは皆無である。しかし、胴下半部乃至底部については残存しており、ある程度の配列を復元することは可能である。30cm以上の比較的大型なものについては、遺構の外側に多く、遺物どうしを結んでいくと規則的なラインが形成される。ランダムな配置ではなく、基本的な設置位置を決定していたと思われる。小型なものについても同様な傾向があり、丁度大型なもの間を埋めていくような配置である。高坏や坏は概ね、その内側に置かれている状況である。坏は、全体的に広がりをもっており、規則性は猶もたいが、模倣杯は遺構の中央部付近に集中している。高坏は中央部付近を中心に全体にみられるが、具体的な配列の復元を行うことは困難である。須恵器は遺構の周辺あるいは南東部で出土しており、すべて破砕された状態である。

鉛直面からの遺物の状況については、多い地点で坏が8～9枚に重なっている。それぞれが同時期での設置かは不明だが、土器間の間層が1cm以内であることから、短期間乃至同時期に近い設置の様相を感じさせる。土器内の底部に置かれた状態で出土した石製模造品は千点近くにのぼり、数枚の重なりのある下段の土器内からも多量に出土している。

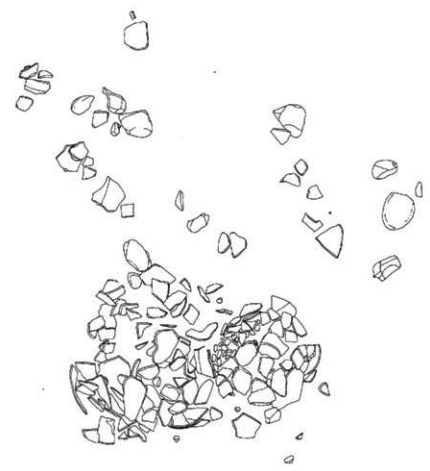
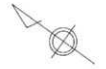
遺構内には多量の礫（3～5cm）が混入しており、遺構外の同時期の土層内に比較すると格

寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡跡全体図(1)



図5 全体図(1)

X=3350



-19-

X=3345

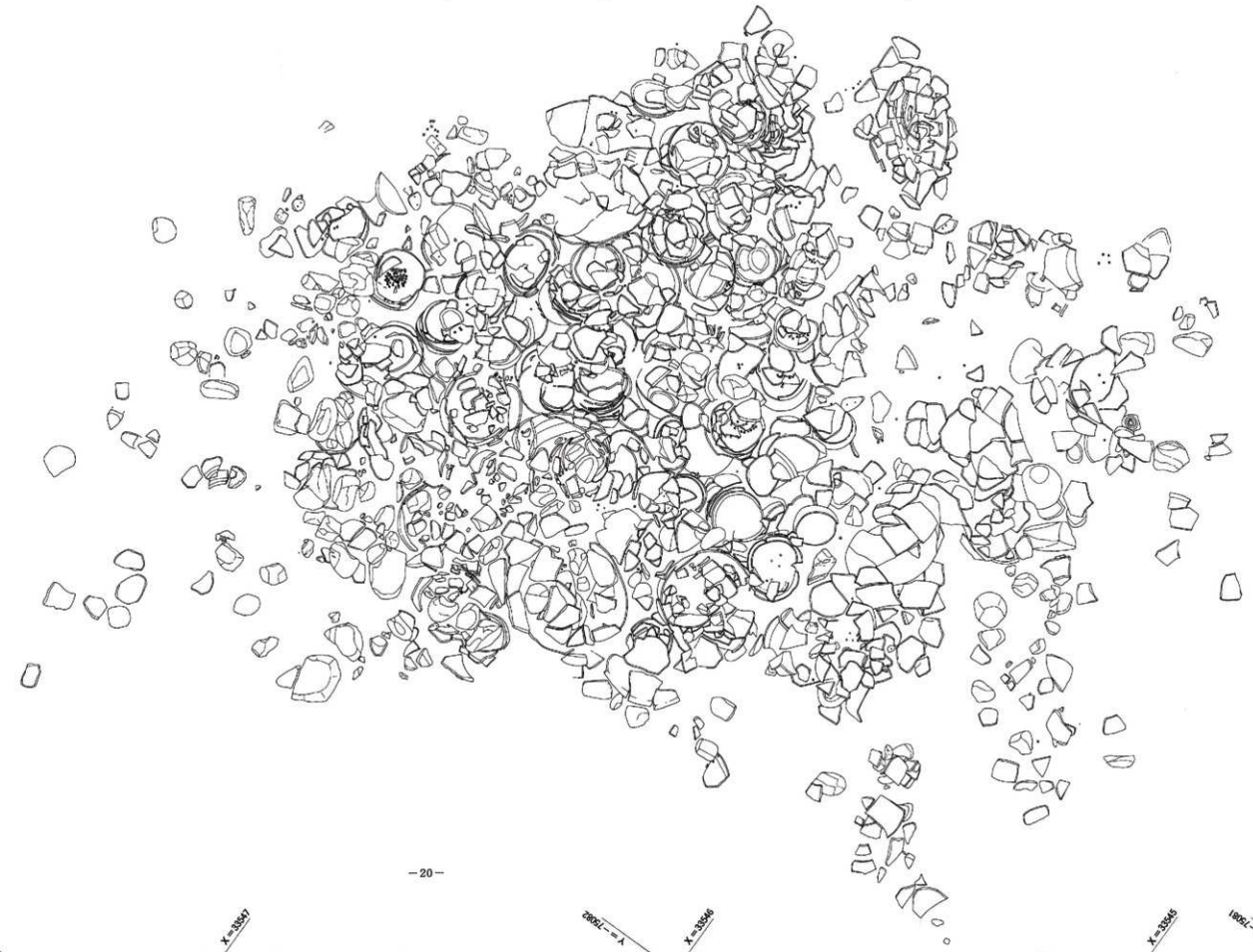
Y=7500

X=3350

-20-

Y=7500

X=3345



0 1 : 10 40 cm

图6 颗粒群全体图

Y=7500

X=3345

Y=7500

段の相違がある。混入状況は明確に確認し難いものが多いが、明らかに置かれたであろうと判断できるものも数点ある。

2号祭祀跡

1号祭祀跡の1.6m北西に位置しているため、別遺構と捉え2号祭祀跡とした。規模は最長部で東西約0.5m・南北約0.6mであり、遺構部は10cm前後の窪地状になっている。浅い掘り込みを作成した後、遺物を設置していったと思われる。北側に甕が2点、南側に壺が1点、西脇に甕の口縁部が1点出土した。その他は、坏や高坏の破片が数点であり、石製模造品は全く出土していない。甕及び壺は逆さの状態出土している。甕は小型の甕に大型の甕が被さるような状態で、口縁部があたかも土に固定されるような様相を呈していた。

7号土坑

1区南壁付近で検出した。調査終了時、埋め戻し間際のトレンチ溝で遺構の北端を検出したという状況であり、詳細については不明な点が多い。他遺構（1層）と切り合っており、2・3層内から遺物は出土している。結果的には遺構のほとんどの部分は調査区外に位置している。したがって、壁を横に掘り込む掘堀的な方法で出土したものが多い。そのようなことから一括上げになってしまった点について、御容赦願いたい。遺物は坏が20個体（内訳は1類が3点・3類が1点で他はすべて2類である。）、甕・壺類が11個体である。その他に土師器や石製模造品については確認されていない。遺物は遺構確認面よりも数十cm低い地点から出土しており、遺構は土坑状の様相を呈すると思われる。投棄及び破砕しているという状態ではないが、甕や坏などが一括に出土している状況などは廃棄的な様相も感じさせる。調査区外への広がりを考えると、相当量の遺物の存在の可能性が予測される。祭祀跡出土物に比較してみると若干傷みはあるが、ほぼ同形式の範疇におさめられる。

4号住居跡

1区中央部北西側で検出された。遺構確認面は灰黄色の粘質土で主軸方位はN-11°-Wである。規模は東西4.5m・南北4.5m以上で確認壁高は2~20cmである。柱穴や周溝は確認できなかった。竈は東壁に造り付けられていたが、袖部等はほとんど残存しておらず、焚き口部が若干確認できる程度であった。竈使用の痕跡を残す凝灰岩が焚き口部周辺に散乱していた。竈の南側には規模が45×50cm・深さ20cm以上の貯蔵穴と思われる小穴を検出した。内部から潰れてはいたがほぼ復元ができた大型壺が出土しており、この小穴内に設置していた可能性も考えられる。遺物は土師器の甕・壺・高坏・坏など、日常生活用具がセットとして出土している。出土遺物は鬼高Ⅰ形式期前半の特徴を有している。

6号住居跡

2区中央区北側で検出された。遺構確認面はにぶい黄色の粘質土で、主軸方位はN-29°-

Wである。規模は東西4.7m・南北4.2mであり、確認壁高は5～18cmである。床面は北側にについては3～4cmの貼り床をしていると思われるが、南へいくに従い後世の自然乃至人為的な影響を多分に受けており、確認するには困難な状況である。主柱穴は4本検出されており、1号柱穴は48×46cm・深さ46cm、2号柱穴は38×40cm・深さ32cm、3号柱穴は16×21cm・深さ13cm、4号柱穴は17×19cm・深さ13cmであった。3号と4号については、上部を削平されており、実際には1号や2号と同規模を有していたと思われる。周溝は二重に巡っており、壁際の周溝（周溝1）と壁より数十cm内側の周溝（周溝2）とが検出された。周溝1は上幅2～3cm・深さ1～2cmでほとんどフラットに近い状態である。周溝2は上幅30～42cm・深さ6～13cmで、上幅・深さ共に一律でない。周溝2の底部には径3～8cm・深さ8～20cmの杭状の痕跡がランダムに検出されている。竈は東壁に造りつけられていたが原形は留めておらず、竈の底部基礎石として使用されていたデイスイト質凝灰岩が確認できるのみである。遺物は土師器が出土している。出土遺物から6世紀後半の住居跡と考えられる。

14号住居跡

3区西側西脇で検出された。13号住居跡と切り合っており、遺構確認面はにぶい黄色の粘質土である。主軸方位はN-117°-Wである。規模は東西6.1m、南北5.5m以上であり、確認壁高は6cm～38cmである。平面形は南側が残存していないが、隅丸方形と思われる。床面は2～3cmの貼り床をしており、住居跡の南北では5cm前後の高低差があるが住居跡構築時も全くのフラットではなかったと思われる。主柱穴は4本検出された。1号柱穴は40cm×33cm・深さ33cm、2号柱穴は32cm×36cm・深さ44cm、3号柱穴は38cm×30cm・深さ42cm、4号柱穴は28cm×34cm・深さ42cmであった。周溝は二重に巡っており、周溝1と周溝2が検出された。周溝1は上幅8～16cmであり、深さは4～8cmである。場所により、凹凸の相違が顕著であり北側が若干深めに掘り込まれている。周溝2は上幅24～36cm・深さ7～16cmであり断面形は緩やかな半円形を呈す。周溝2は竈下を走行しており、竈構築時には周溝は閉じていたと思われる。周溝2の底部には径4～8cm・深さ4～12cmの杭状の痕跡が北側を中心に不規則に検出されている。周溝2を埋没させた土層からは杭状痕は確認できず、周溝が開閉していた時の遺構と思われる。竈は東壁のやや南寄りに造り付けられており、規模は全長96cm・焚き口部54cmである。天井部は崩落してしまい両袖約20cm残存しているのみである。焚き口部から袖部にかけては、埋没した周溝の上部に整然とデイスイト質凝灰岩を敷き詰めている。袖部には凝灰岩を重ね、その上部に不純物を含む灰褐色粘質土を馬蹄形に巡らしている。竈中央付近では、支脚石に使用されたと思われる底部径約5cm・高さ8cmの円柱形のデイスイト質凝灰岩が出土した。竈の手前1m四方には灰の掻き出し跡が確認できる。遺物は、須恵器高坏・土師器の甕や坏が出土している。出土遺物や住居形態等から6世紀中葉から後半の住居跡と考えられる。

15号住居跡

3区西側南西脇で検出された。遺構確認面はにぶい黄色の粘質土である。主軸方位はN-103°-Wである。規模は南北1.8m以上、東西約4.6mであり、確認壁高は3～8cmである。平面形は隅丸方形に近い形状を呈するものと思われる。2～3cmの貼り床が施されており、貯蔵穴は確認できなかった。主柱穴は2本検出されており、1号柱穴は32×28cm・深さ44cm、2号柱穴は33×28cm・深さ52cmであった。それらの柱穴は径1～5cm程の小椋の層を貫通して粘土層まで到達していた。周溝は二重に巡っており、周溝1と周溝2が検出された。周溝1はフラット乃至約1cmの深さで残存している程度である。周溝2は上幅24～40cm・深さ8～16cmである。断面形は半円形であり、周溝底部には径4～7cm、深さ3～8cmの杭状痕が確認できる。竈構築時には周溝は閉じていた。竈は全長90cm、焚き口幅36cm以上であり、煙道部も含めると1.5m以上の長さとなる。右袖部よりも左袖部の残存状況が良好であり、内壁に焼土を顕著に認める。竈内からは残存状況の良好な甕や甗が、造り付けられた当時の様子を彷彿させるかのような状態でも出土している。支脚石には縦幅・横幅ともに4～5cmの鮎川系の砂岩が使用されていた。煮物具だけでなく什器も出土しており、この住居跡では食住としての日常生活が営まれていたと思われる。遺物は奈良遺構から出土したものと大変類似しており、ほぼ同時期が若干く異なる可能性が高い。

16号住居跡

3区西側北西隅で検出された。遺構確認面はにぶい黄色の粘質土である。主軸方位はN-116°-Wである。規模は東西3.2m以上、南北4.5m以上であり、確認壁高は4～15cmである。平面形は不明である。床面は3～4cmの貼り床をしているが若干傾斜しているために全体として一律ではない。貯蔵穴は確認されなかったが主柱穴は1本検出された。主柱穴は25cm×25cm・深さ26cmとやや浅いが、それは地山部が小椋を多量に含み安定した地盤を形成していることに起因しているからと思われる。周溝1と周溝2が二重に巡っている。周溝1は上幅9～10cm・深さ2～4cmであり、東壁では南にいくにしたがって深度が浅くなる。周溝2は上幅30～40cm・深さ13～20cmであり、断面形は半円形を開き気味にした形状を有する。周溝は竈下を走行しており、竈構築時には閉じている。周溝底部には径5～8cm・深さ4cmの杭状痕を確認できる。地山部には小椋が混入しているために浅めのものが多く判別に苦慮するものも少なくない。杭状痕は周溝開口部に存在していたものである。竈両袖はほとんど残存しておらず、燃焼部に敷かれていたデイスイト質の凝灰岩のみが検出された。竈北側の周溝内からは須恵器杯蓋が床面からは小型甕が出土している。出土遺物から6世紀中葉から後半の住居跡と考えられる。

17号住居跡

3区西側南東脇で検出された。遺構確認面はにぶい黄色の粘質土である。主軸方位は、N-

119°-Wである。規模は、東西2.5m以上・南北2m以上、確認壁高は18~40cmであり、平面形は不明である。床面は1~2cmの貼り床をしており、貯蔵穴は確認できなかった。主柱穴は1本検出されており、60×50cm・深さは54cmである。断面形はロート状を呈しており、柱穴の中層付近から、滑石製の模造品が出土している。周溝は周溝1と周溝2が二重に巡っていた。周溝1は上幅11~12cm・深さ2~3cmであり、周溝2は上幅28~42cm・深さ16~18cmである。断面形は開き気味の半円形を呈し、底部に枕状痕を確認できる。地山が粘質土のため枕状痕は比較的深めである。従って、検出状況は比較的明瞭なものが多い。遺物は灰や白玉が床面直上で出土している。6世紀の住居跡と考えられる。

19号住居跡

3区東側南東部で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。主軸方位はN-25°-Wである。東西5.2m・南北2.1m以上、確認壁高は15~37cmである。平面形については、調査区外のために南側が確認されていないが、主柱穴の配列状況から隅丸方形に近いものと思われる。床面は2~3cmの貼り床をしており、貯蔵穴は確認できなかった。主柱穴は2本検出されており、1号柱穴は24×21cm・深さ50cm、2号柱穴は24×30cm・深さ45cmであった。1号柱穴は柱穴の内壁に壁の胴部を貼付するように固定しており、主柱の安定性を意識した構造が窺える。周溝は周溝1と周溝2が二重に巡っていた。周溝1は上幅4~8cm・深さ3~5cmであり、周溝2は上幅24~36cm・深さ13~18cmで、断面形は半円形を呈す。周溝2内底部で検出された枕状痕は、径5~10cm・深さ6~8cmであった。竈構築時に周溝2は閉じていたと思われる。竈は全長86cm以上、焚き口部幅36cm以上であり、両袖ともに焚き口部幅が若干崩落していた。竈の構築には、凝灰岩は使用せずに灰褐色の粘質土のみで作り上げている。切断した袖部内から白玉が出土しており、竈築期の関わりを想定させる。焼土や炭化物が竈以外の何方所かで、大きなまとまりをもって出土している。火災等の影響というよりも、この周辺が比較的湿気を帯びやすい地形となっており、その対策となる1側面としての要素が高い。遺物は一定箇所に集中することなく、住居跡全体から出土している。土師器の甕・灰・杯や須恵器の短頸甕・長頸甕・杯など多様な遺物が出土しており、食生活に関わる日常の営みの痕跡を強く残している。出土遺物から6世紀後半の住居跡と考えられる。

20号住居跡

4区中央付近で検出された。遺構確認面にぶい黄色の粘質土である。主軸方位はN-22°-Wである。規模は東西5.9m以上、南北5.9m以上とかなり大型であり、確認壁高は4~12cmである。南側や東側の壁は残存していないが、周溝の残存状況から平面形は隅丸方形になると思われる。主柱穴は4本検出されているが、4号柱穴については、溝に上部をきられており深度数cmの残存度である。1号柱穴は30×34cm・深さ68cm、2号柱穴は27×32cm・深さ56cm、3号

柱穴は22×20cm・深さ64cmである。周溝は周溝1と周溝2とが2重に巡っている。周溝1は残存度が良好でなく、若干窪みを有する程度である。周溝2は上幅18~27cm・深さ14~17cmで断面形は半円形かやや縦長の楕円形状を呈す。枕状痕は径8~10cm・深さ14~16cmである。遺物は灰や高杯が一箇所から何点かまとまって出土している。灰は6世紀前半の特徴を有するタイプである。

21号住居跡

3区東側南西部で検出された。住居跡になるかは不明であるが、堅穴状の遺構ということで住居跡の範疇におさめた。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。主軸方位はN-7°-Wである。規模は東西4.9m、南北1m以上であり、確認壁高は10cmである。平面形は南側が調査区外にあたるため不明である。周溝1と周溝2は確認されていない。遺構中央付近では深さ約10cmの窪みの中に小礫とともに遺物がまとまって出土している。窪みは自然の力というよりも、人工的に形成された可能性が高く、遺物も投棄されたような状況である。焼土や炭化物粒等も確認できるが、火を利用したといえるほど顕著なものでもない。出土した遺物は甕・灰・高杯などである。

22号住居跡

3区西側西脇で検出された。遺構確認面にぶい黄色の粘質土である。主軸方位はN-15°-Wである。規模は東西3.2m、南北3.1m以上である。平面形は方形に近い形状を呈し、確認壁高は2~6cmである。床は2~3cmの貼り床をしており、貯蔵穴や柱穴等は確認できなかった。周溝は周溝1と周溝2が検出された。周溝1は深さ約1cm規模の窪みで断続的に確認できる程度であり、周溝2といえる程明瞭のものではない。北側の周溝1内では滑石製の勾玉が出土している。周溝2は上幅24~30cm、深さ11~20cmであり、断面形は半円形を呈す。周溝2は住居の規模からみた時にかなり大きな割合を示す。枕状痕は上幅6~8cm、深さ約7cmであり、やや不規則に検出されている。竈は全長80cm以上、焚き口部30cm以上である。残存状況が大変悪く、袖部がかろうじて残っている状態である。竈底部にはデシサイト質の凝灰岩が敷き詰められていた。14号住居跡の構築時やその後の崩落等の影響で南側の壁や周溝はほとんど残存していなかった。

24号住居跡

3区東側北西部で検出された。遺構確認面は黄褐色の粘質土である。主軸方位は、N-17°-Wである。住居跡の壁が全く残存していないために、規模については周溝2の大きさをもとにした推測域となるが東西4m以上、南北3m以上になる。周溝については、上幅14cm以上、深さ5cm以上となる。遺物は6世紀後半の灰や甕が出土している。甕が出土した周辺40cm四方には焼土痕を確認できた。

25号住居跡

5区西側で検出された。遺構確認面は灰黄色の粘質土である。主軸方位は $N-16^{\circ}-W$ である。南側は中世堀に大きく切られており、壁や周溝を確認することは不可能である。規模は東西6m以上、南北2m以上であり、6mを超える大型住居になるものと思われる。確認壁高は44～50cmである。床面は約5～10cmの貼り床をしており、貯蔵穴や竈は確認できなかった。主柱穴は2本検出されており、1号柱穴は $32\text{cm} \times 40\text{cm}$ ・深さ38cmであり、2号柱穴は $40\text{cm} \times 40\text{cm}$ ・深さ60cmであった。周溝は周溝1と周溝2とが二重に巡っていた。周溝1は、上幅8～10cm・深さ約8cmであり、周溝2は上幅35～50cm・深さ12～14cmであった。両周溝ともに西へ向かうに従い浅くなり、最終的に遺構ラインを確認するには困難な状況になる。焼土や炭化物を多量に含有する大型のブロックを何カ所か確認できるが、床面直上ではなく、床面との間に1～2cmの間層を挟んでいる。住居跡廃棄直後の痕跡と思われる。

26居跡

5区で25号住居跡の東側で検出された。21号住居跡と同様に住居跡になるかは不明であるが、竪穴状遺構ということで、住居跡の範疇とした。遺構確認面は灰黄色の粘質土である。主軸方位は $N-26^{\circ}-W$ であり、規模は南北3.6m以上・東西4.6m以上、確認壁高は2～3cmである。西側の壁際に20～40cm四方の焼土跡を検出したが、煮沸施設は確認されていない。南側が中世堀によって切られており、詳細については不明である。遺物は壺の下半部的な形態を呈した鉢状の土師器が出土している。口縁部に鋸歯状の切れ込みが施されている。

2、奈良平安時代

1号住居跡

1区東側で検出された。遺構確認面は灰黄色の粘質土で、主軸方位は $N-7^{\circ}-W$ である。規模は東西2.9m・南北2.8mで、確認壁高は1～7cmである。南側の約1/3についてはほとんど壁は残存していない。床面は概灰質の小礫の混入が顕著であり、貼り床の有無については確認が困難であった。竈は東壁に造りつけられていたが、1号溝にほとんど切られており、焚き口部の手前あたりに焼土が確認できる。

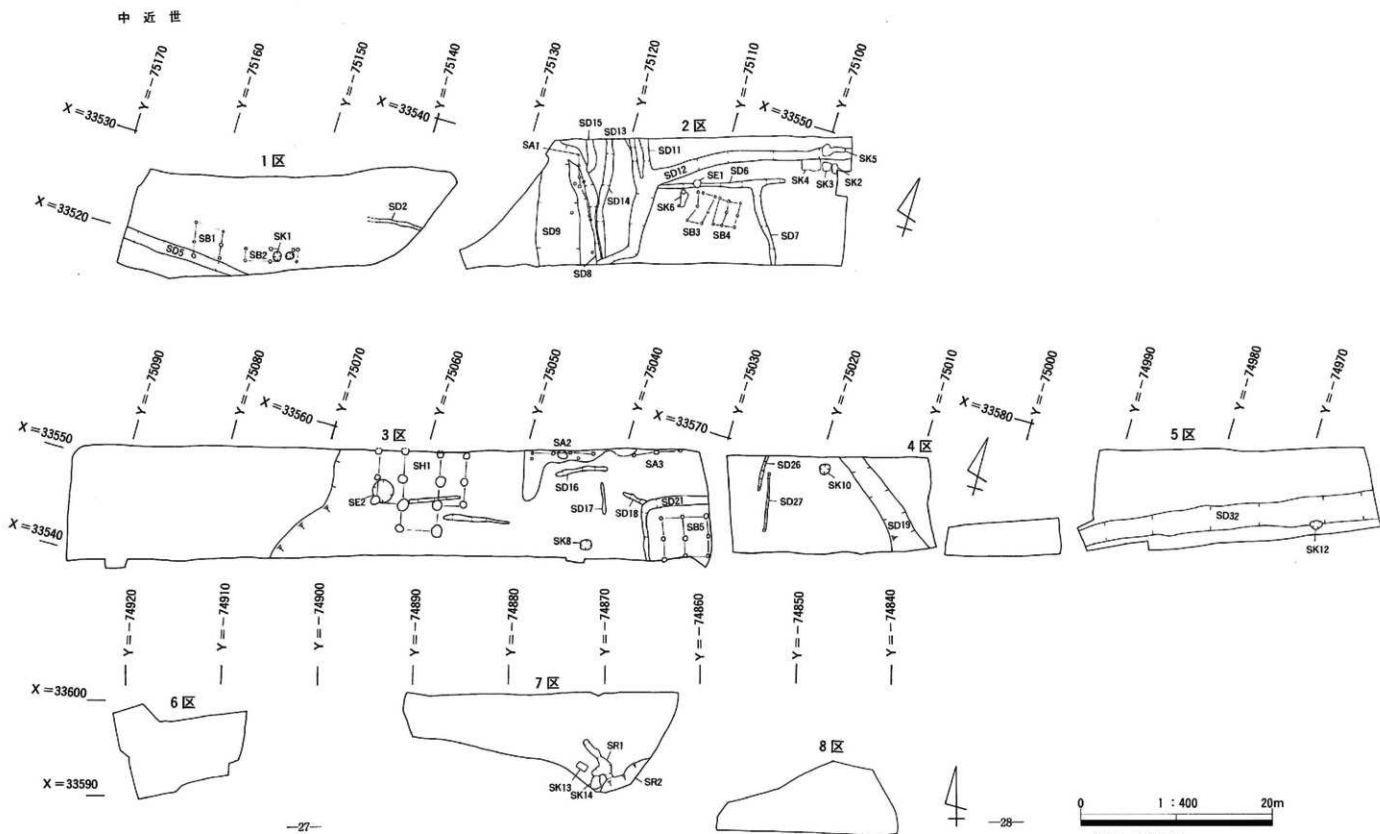
2号住居跡

1区東南側で検出された。遺構確認面は、小礫を含有する灰褐色の粘質土で主軸方位は $N-11^{\circ}-W$ である。規模は東西2.7m・南北1.6m以上で、遺構確認面は2～6cmである。須恵器の坏・蓋・甕などが出土しており、遺物の特徴等から8世紀の住居跡と考えられる。

5号住居跡

2区中央部やや西側で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土で、主軸方位は $N-11^{\circ}-W$ である。規模は東西3.2m・南北3.3mであり、確認壁高は2～24cmである。床面は2～3cm

寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡跡全体図(2)



の貼り床をしており、東側から西側にかけて若干傾斜していく。柱穴や貯蔵穴は確認されなかったが、竈は東壁のやや南よりで検出された。竈壁は2～3cmの残存状況であり、焚き口周辺の床面には焼土や煤の付着したデイサイト質凝灰岩が確認された。竈の北脇には須恵器の蓋、土師器の壺・杯・皿などが床面に突き刺さるような状態で出土した。住居跡の形態や出土遺物等から8世紀の住居跡と考えられる。

7号住居跡

2区中央部南側で検出された。遺構確認面は灰黄色の粘質土で主軸方位はN-21°-Wである。規模は東西2.5m・南北は南側の残存状況が悪く約1m確認できるのみである。確認壁高は5～7cmであり、柱穴及び貯蔵穴は確認できなかった。竈は北壁中央付近で検出された。袖部及び焚き口底部に敷かれた基礎石的なデイサイト質の凝灰岩が残存しているのみであり、上部はすべて削平されていた。凝灰岩は右袖部から左袖部にかけて隙間なく詰め込むようにしてあり、強固な構築方法が予測できる。底部に敷かれた凝灰岩については、湿気対策的な側面も兼ね備えていたものと思われる。遺物は土師器壺・杯が出土している。住居跡の形態や出土遺物等から7世紀後半から8世紀の住居跡と思われる。

13号住居跡

3区西側西脇で検出された。遺構確認面はにぶ黄色の粘質土で、主軸方位はN-128°-Wである。規模は東西約3.2m・南北約2.6mであり確認壁高は15～35cmである。緩斜面に建てられた住居跡なので、斜面の上部に位置する北壁と下部に位置する南壁とでは住居築造時から深度に相違があったものと思われる。平面形は東西方向に長い隅丸長方形となる。床面については、南側に1～2cm程の貼り床をしており、貯蔵穴及び柱穴については確認できなかった。竈は東壁中央付近に造り付けられており、焚き口幅43cm・全長97cmであった。外部に長い煙道が導出されていた。竈構築にあたっては、床面にあたる袖部から焚き口部にかけて、デイサイト質凝灰岩を整然と配列してあった。竈の基礎部としての役割より、湿気対策的な要素が大きと思われる。その後、袖部については、不純物の混入度の高い灰褐色粘質土を貼付している。焚き口部には、径約8cmの砂岩質の小礫が支脚として使用されている。遺物は焚き口部を中心とした竈周辺に散在しており、すべて破片状のものである。主な出土遺物は、須恵器壺や蓋・土師器壺などである。住居形態や出土遺物などから8世紀の住居跡と考えられる。

18住居跡

3区東側南東部で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。主軸方位はN-12°-Wである。規模は東西3.5m・南北1.5m以上であり、確認壁高2～9cmである。平面形は隅丸長方形から方形に近いものと思われる。19号住居跡の東側を切るような状況で構築されているが、壁高が浅いうえに後世の浸食が激しいため、残存状況は良好でない。竈・貯蔵穴・柱穴等

については、確認されていない。遺物や須恵器の坏や碗・灰釉陶器片などが出土している。出土遺物や住居形態などから9世紀後半から10世紀前半の住居跡と考えられる。

23号住居跡

3区東側中央付近で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。主軸方位は、N-103°-Wである。規模は東西2.8m・南北2.4mであり、確認壁高は3～5cmである。貼り床については明瞭な確認はできず、貯蔵穴や柱穴等については検出されなかった。竈は全長45cm、焚き口部幅40cmである。焚き口部周辺には径5～10cmの小礫が散在しているが支脚に使用されたかは不明である。遺物は破片が数点確認されている。9世紀の住居跡と考えられる。

27号住居跡

6区北壁で検出された。遺構確認面は灰黄色の粘質土であり、主軸方位はN-97°-Wである。規模は東西3m・南北1.6m以上で、確認壁高は1～5cmである。南壁についてはほとんど残存しておらず、上幅のラインが若干確認できる程度である。竈についても煙道部は辛うじて確認できるが、袖部についてはほとんど原形を留めていない。規模は東西0.7m以上、南北0.3m以上である。焼土や炭化物が焚き口部から煙道部にかけて確認できた。

30号住居跡

7区東側で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土で、主軸方位はN-13°-Wである。規模は東西2.2m・南北1.8m以上で、確認壁高は1～10cmである。床面は1～2cmの貼り床をしているが、北西から南東方向に緩やかな傾斜をしている。竈は住居跡の北西隅に造り付けられており、規模は東西55cm・南北56cm以上になる。燃焼部の両脇には、電線用に使用されたと思われる灰色の粘質土が残存していた。焚き口部付近には灰層が5～8cmの厚さで堆積しており、燃焼部から煙道部にかけての傾斜部分には焼土が一面で確認できた。遺物は須恵器坏やコの字甕が出土している。出土遺物や住居形態から9世紀後半の住居跡と考えられる。

1号溝

1区東側で南北方向に8m検出した。遺構確認面は灰黄色の粘質土である。規模は上幅0.4～1mであり、深さは0.3～0.48mである。溝の中央付近に集中して、須恵器の蓋や破砕された甕が小礫と共に出土した。溝は西脇の住居跡を切っており、流れ込みという意図的に構築した可能性が高い。

23号溝跡

4区東側で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。溝の中央部付近は走行が同一である中世の案研状の堀と重複している。南北方向に走行しており、南壁付近に到達すると自然谷地に流し込む形態をとっているためか、溝の形状は崩れてくる。規模は上幅3.2～3.6m深さ0.9m以上であり、比較的傾斜は緩やかである。出土遺物は主に10世紀のものが多く、須恵

器の罍・長頸壺・甕・碗・坏や灰釉陶器の碗・長頸瓶など多様である。

31号溝跡

4区東側証張部で検出された。遺構確認面には灰黄色の粘質土である。自然谷地形の傾斜部を利用して掘り込んだ溝の中に、破砕された状態で遺物が廃棄されていた。主な出土遺物は須恵器の罍・長頸壺・蓋や土師器の甕などである。約9割は須恵器であり、特に甕は大量も含め10点以上にのぼる。木製品や墨書土器などは確認されていないが、遺物の出土地点や出土状況などから一種特別な遺構の様相を感じさせる。掘り込まれた溝は長さ約4.7m以上・上幅0.7～0.9m・深さ10～20cmである。遺物は傾斜の急な部分をやや広めに掘り込んだところほとんどが集中しており、小礫も相当量混入していた。完全に復元できるものは皆無であり、地形上流に押し流されたものもあると思われる。

3、中近世

9号溝跡

2区西側で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。規模は上幅2.2～4.5m深さ0.4mである。緩やかなスロープ状の断面形を有しており、旧谷地地形を利用して溝を掘りあげている。小溝が分岐したり、合流したりしており、給排水的な機能を多分に含んでいる。底部から15～16世紀にかけての軟質陶器の罍・鉢・片口などが出土している。

12号溝跡

2区中央部西側で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。規模は上幅0.8～1.9m・深さ0.4～0.5mである。東から西へ20m走行した後、ほぼ直角に折れ曲がって南へ走行する。溝の内側にはほぼ同時期の掘立建物跡や井戸跡などが検出されており、小區画ながら一種の郭的な様相を感じさせる。また、溝の屈曲する付近で小溝を取り入れ、南壁付近で西に屈曲することから、給排水的な要素も兼ね備えていたものと思われる。遺物は、軟質陶器の罍・鉢・焙烙、陶器皿（長石釉）・鉄製皿など多様であり、主に17世紀のものが多く、出土状況や遺物から溝は中世後半に開口され、17世紀代に埋没したものと思われる。

32号堀跡

5区内を貫通するように、中世の館址に関わると思われる堀を東西方向に約30m検出した。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。規模は上幅3.5m以上・下幅0.38～0.5m・深さ1.3m以上であり、断面形は箱型である。堀は西端が南側に屈曲していくことが確認されており、約1m西側に位置する側溝から数メートル西の部分は旧谷地形であり、堀として利用されていたと思われる。東側については検出した最東端部分から東へ25～30m走行した地点が道路及び側溝になっている。もともと大きな浸食谷の部分であり、浸食谷の東側で堀が確認されないことから、この谷を堀の一部として利用していたと思われる。東西幅65～70m・南北は雁行川に

到達するような自然地形を利用した郭を形成していた可能性が高い。堀内の北側上部には径10～15cm前後の櫓状の痕跡が約7mの範囲で確認された。

5号掘立柱建物跡

3区南東端で検出された。遺構確認面は灰褐色の粘質土である。柱穴の周囲には溝が巡っているが、掘立柱建物跡と一体になる遺構と思われる。2間×2間の建物跡であり、規模は東西4.6m・南北4.5m以上、柱間は南北東西方向共に2.0m～2.2mである。棟方向は南北であり、西側の棟方向には補助柱が使用されている。南に位置する柱穴は比較的深さもあり、礎の詰め込まれているものが多かった。傾斜地で南側により負荷がかかることからこのような方法がとられたのであろうか。混入状況から、底部に礎盤石を敷き、柱の周囲を礎で固定して主柱穴の安定を計ったものと思われる。

1号礎石建物跡

3区中央付近で検出された礎石建物である。丘陵の傾斜面を削り、平坦面を形成して建物を建てている。削平の範囲は東西約19m、南北11m以上であり、更に北へ拡がりをみせる。規模は南北5.4m（中央8.3m）以上、東西9.2mであり、南側の中央部分が1間分張り出す構造である。柱間は、東西方向については中央部が3.8m・両脇が2.7m、南北方向については、中央部が2.8m・両脇が2.6mである。基礎部は1.2～1.4m・深さ0.25～0.45の規模で隅形に掘り込み（両脇は0.7～0.9m）、最下層に粗砂をひき、その上部に径10～15cmの栗石を、最上部に径0.5m以上の大型礎を乗せてある。棟方向は南北でありN-16°-Wになる。中央部の基礎は両脇に対比するとなかなか堅固な構造となる。周辺で検出された溝は礎石建物に伴う遺構と考えられ、湿気対策的な要素が考えられる。尚礎石として使用されていた礎を石材鑑定した結果、砂岩（50%）、珪質頁岩（19%）、流紋岩（12%）、チャート（10%）、その他（9%）となる。割合の高いものは観音山丘陵の中の人に比較的に確認できる石材でもある。

第二節 遺物

1. 古墳時代

祭祀跡から出土した遺物は土師器・須恵器・石製模造品であり、土師の種類は坏・高坏・甕・壺・鉢・手づくね土器・甕などである。総量は、土師器が坏200個体、甕・壺・鉢50個体、高坏50個体、須恵器11個体となり、トータルで約300個体以上となる。破片のために数量計測不能なものや傾斜地という地形上の問題から下流に流れられたもの等も含めると、それ以上の数量の存在が想定される。坏については完形品に近いものも確認できるが、甕や壺については完形品は皆無であり、ほとんどが胴下半部及び口縁部のみの出土である。長年の間の土圧やその後の耕作などにより、破壊されたものと思われる。

石製模造品は種類分類が可能なものは78個体であった。剣型55点（70.3%）、有孔板10点

（13%）、勾玉6点（7.7%）、その他6点（刀子3個、櫛2個、ひし1個、平鎌？1個 9%）である。そのほかに5mm～2cm程の小破片が約35点確認されており、総数としては80点以上の存在が考えられる。剣型乃至剣型状の模造品が全体の7割を占め、極めて多いことがわかる。白玉は欠損のはほとんどない完形にちかいものが約1900個体、破片や半個体などのものも含めると、約2000個体になる。遺構の検出場所が傾斜地のために祭祀跡の周辺に散乱していた白玉もあった。そのような点も考慮にいれると、実際には2000個体以上あったことは、想像に難くない。模造品は、比較的小型で扁平のものがほとんどであり、作りもやや粗雑で精緻さが欠如する。粗製を多量に生産していたことが想定される。

当該期の遺物で、祭祀跡出土以外ほとんどが住居跡出土であり、6世紀後半に比定される遺物が多い。土師器は甕・坏・高坏が主であり、若干壺が確認できる。須恵器は高坏・坏・短頸壺・長頸壺などであるが、全体に占める割合は低く、各住居跡より1点前後の出土である。石製模造品は15、17、19、22、25号住居跡より出土している。

尚、土師器及び石製模造品の分類については祭祀跡出土遺物のみに限定して行った。

土師器

(1) 器種分類

坏（櫛）・高坏・甕・壺・鉢については、形態及び規模などから基準線を設けて分類を試みた。特に、甕と壺については、今までにも形態・調整あるいは用途上から分類が行われてきているが、厳密な意味で細分していくには困難であり、問題点も多い。したがって、本紙では調整方法の特徴をもとに、便宜上数値を設定して甕と壺とを大別し、頸部径対胴部径の比率が1対1.9以上のものを壺とし、1対1.9未満のものを甕と規定した。

a、甕

主に長胴形の傾向の強いものと、球胴形の傾向の強いものとに大別し、胴部最大径対胴長の比率が1対1.1以上のものを長胴系（1類）とし、1対1.1未満のものを球胴系（2類）とした。

1-a類 器高が35cm以上の大型のもの。胴部中央付近で最大径をもち、口縁部はくの字に外反する。

1-b類 器高が30cm前後でa類より、若干小型なもの。口縁部が緩やかな曲線を持ちながら外反していくものと、明瞭なくの字外反するものがある。くの字外反するものの中には、口縁部が短く胴部最大径が中央付近のものと、口縁部がやや長く胴部最大径が中央より上部に位置するものがある。

1-c類 器高が22cm前後の中型のもの。口縁部はくの字に外反し、胴部最大径は中央部よりやや上部に位置する。

2-d類 器高が35cm以上の大型のもの。口縁部はくの字外反するが、緩やかな曲線のものと、

器種分類図

() 内の数字は土器番号を示す

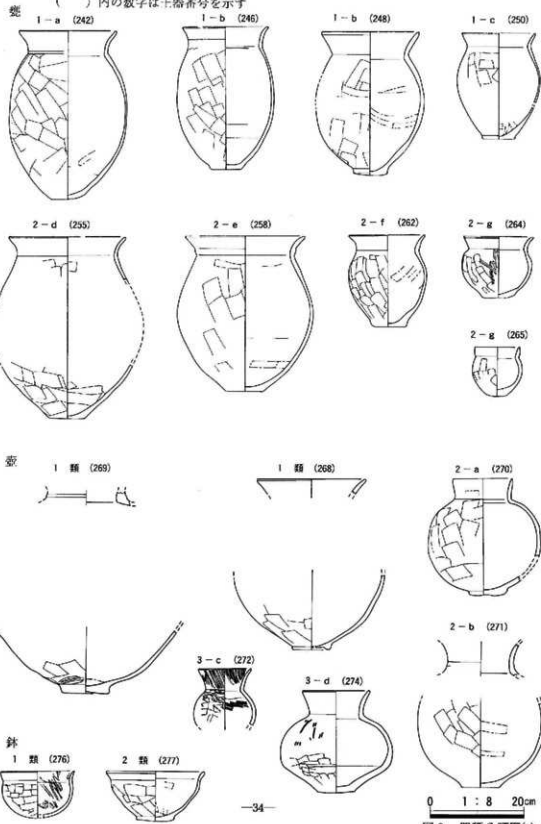


図8 器種分類図(1)

高杯

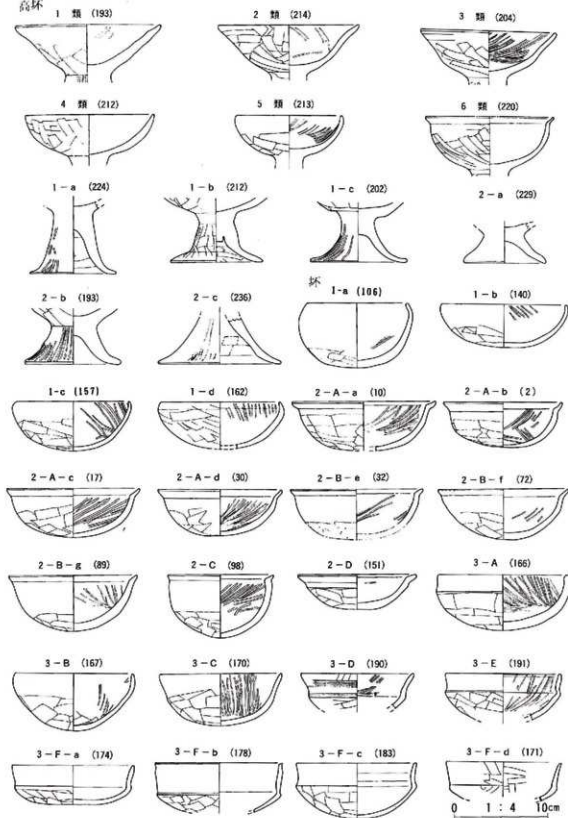


図9 器種分類図(2)

屈曲の強いものがある。

2-e 類 器高が30cm前後でd類よりやや小型なもの。口縁部がくの字外反するものの中には、小さく直線的な外反をするもの、段差をもっているもの、挟むような強い屈曲を示すものがある。胴部最大径は、すべて中央付近である。

2-f 類 器高18cm前後の中型のもの。胴部は緩やかな球形を呈し、口縁部は小さく緩やかに外反するものと、胴部最大径が中央より上部に位置し、緩やかなくの字形とコの字形に外反するものがある。

2-g 類 器高12cm前後の小型なもの。口縁部が直線的なくの字外反をするものと、丸みを帯びながら直立に近い状態でちあがるものがあり、ともに球形で胴中央より上部に最大径をもつ。

b、変

大型（1類）・中型（2類）・小型（3類）にわけ、更に中型と小型を2形式に分類した。

1類 器高が30cm以上の大型のもの。底厚で平底状の底部を持ち、大きく左右に開きながら、球形を呈して立ち上がる。口縁部は、直角に近い状態で屈曲したあとほぼ直立するものと、挟むようなくの字屈曲を示すものがある。

2類 器高が30cm以下の1類より小型なもの。

2-a 類 口縁部が緩やかな曲線を呈して立ち上がり、平底状の底部を持ち、胴部は球形になる。

2-b 類 口縁部は若干外反するがほぼ直立する。平底状の底部で、胴部は球形を呈す。

3類 器高が25cm以下の小型なもの。

3-c 類 丸底で球形を呈し、口縁部は緩やかにくの字状に外反する。

3-d 類 平底で、胴部中央付近が左右に大きく張り出し最大径となる。口縁部は直線的なくの字外反をする。

c、鉢

形態上から1類と2類に分類した。

1類 丸底で大型碗状の球形を呈す。口縁部は緩やかなくの字状に外反する。

2類 平底で左右に大きく開きながら立ち上がる。胴上部で若干内傾した後、緩やかに外反。

d、高杯

高杯については、杯部及び脚部の形態がバラエティでトータルとしての分類は困難であった。したがって、杯部・脚部のそれぞれについて分類を試みた。

①杯部

1類 脚基部から直線的もしくは若干外反ぎみに立ち上がる。

2類 杯部下半で緩やかな丸み持ち、口縁部で外反。

3類 杯部下半で稜をつくり、直線的に開く。

4類 若干開きぎみに立ち上がるが、全体に丸みを帯びる。

5類 全体に丸みを帯び、口唇部で更に湾曲。

6類 口縁部が内側に内傾していく。

②脚部

柱部から裾部にかけて、屈曲が強く明瞭なものを1類、1類に比べて屈曲が弱く不明瞭なものを2類とした。

1-a 類 柱部は若干長めで、やや幅狭のハの字状を呈す。裾部は短く、直線的になる。

1-b 類 柱部は短めで、直線あるいは外反ぎみのハの字状を呈す。裾部ではやや丸みを帯びる。

1-c 類 柱部は短く、外反ぎみのハの字状を呈す。裾部では更に外反傾向が強くなる。

2-a 類 柱部は短く、直線的なハの字状を呈す。裾部は丸みを帯びる。

2-b 類 柱部は短くて大変厚みがあり、直線的なハの字状を呈す。裾部では外反する。

2-c 類 柱部は外反ぎみに開き、裾部径が大変大きい末広がりになる。

e、杯

素口縁部と呼称されている内側に湾曲していくものを1類、口縁部で外側に折れる内斜口縁部と呼称されているものを2類、須恵器を模倣していることから模倣杯と呼称されているものや屈曲の顕著なものを3類とした。更にそれぞれ類型化されたものの中を何形式かに分類した。器高対口径の比率が、1類においては1:1.9以下、2類においては1:2.1以下という器高が高く湾曲の顕著な球形のものや2類において同比率が1:3.2以上という器高が極端に低く湾曲の弱いものなどが存在する。呼称するための便宜上、前者を碗状タイプ・後者を皿状タイプとする。

①1類

1-a 類 底部から丸みをもちながら立ち上がる。体部上半から口縁部にかけて内側に強く湾曲する。前述の碗状タイプの範疇。

1-b 類 底部から丸みをもちながら立ち上がり、半球形を呈す。1-a類より、湾曲度が弱いもの。

1-c 類 底部は丸みを有するが、体部上半は直線的に開く。口縁部で折れるように内湾する。

1-d 類 やや器高が低く、底部から体部にかけては直線的な丸みを呈する。口縁部では内側に強い屈曲を示す。

②2類

口唇部がとびだし縁をつくるものをA類、縁をつくらないものをB類、碗状タイプのものをC類、皿状タイプのものをD類とした。

2-A-a類 体部と口縁部との間に明瞭なくびれを認める。口縁部は丸みを持ちながら小さく内湾する。口縁部内面は中央部が緩やかに窪む。

2-A-b類 体部と口縁部との間に明瞭なくびれを認める。口縁部は直線的乃至緩やかな外反傾向を示す。

2-A-c類 体部と口縁部との間のくびれは緩やかになる。口縁部は緩やかに内湾する。

2-A-d類 体部と口縁部との間のくびれは緩やかになる。口縁部若干長めで直線的乃至緩やかな外反傾向を示す。

2-B-e類 体部と口縁部との間に明瞭なくびれを認める。口縁部は直線的乃至緩やかな丸みを持つ。内面は2-A-a類と異なり中央部に窪みはみられない。

2-B-f類 体部と口縁部との間のくびれは緩やかになる。口縁部は緩やかな丸みを持つ。

2-B-g類 体部と口縁部との間のくびれは緩やかになる。口縁部は直線的乃至緩やかな外反傾向を示す。

2-C類 球形状を呈し、口縁部は直線的に立ち上がる。

2-D類 体部と口縁部との間のくびれは弱い。底部から体部にかけて、左右に開きぎみの緩やかな丸みをもつ。

③ 3類

模倣杯と呼称されてきた形態のものをF類とした。E類については、形態上は模倣杯の範疇に属するものと考えられ、調整上の相違（ミガキが入る）から別形式とした。

3-A類 口縁部と体部との間に縁を形成する。口縁部は直立する。器肉が厚く、内面に放射状のミガキを施す。

3-B類 底部から体部にかけては緩やかな丸みをもち、口縁部は直立する。内面に放射状のミガキを施す。

3-C類 口縁部と体部との間に弱縁及び沈線を確認する。口縁部は外反気味に開く。

3-D類 口縁部は開きぎみであり、緩やかな外反傾向を示す。内面にミガキを施す。

3-E類 口縁部は直線的乃至緩やかな外反傾向を示す。器肉はやや厚く、内面にミガキを施す。

3-F類 模倣杯の範疇に属するものについて、4形式に分類を試みた。

a類 口縁部は直線的乃至やや丸みをもつ。体部は比較的浅い。口唇部付近に窪みをもつものもある。

b類 口縁部はほぼ直立する。口縁部はやや長く、中央付近に緩やかな縁を持つ。

c類 口縁部は緩やかに外反する。体部は比較的深い。

d類 体部と口縁部との間に緩やかな縁をもつ。口縁部は直線的に開き、塗彩されている。

(2) 土器器の概要

a、杯

杯全体からみた器種別の割合は、1類33%、2類53%、3類14%となる。更にその中での模倣杯の占める割合は11%である。模倣杯は概ね陶器編年のTK47~MT15に位置づけられるものと思われる。口径については、1類は11~12cmに、2類は13~14cmに、3類は12~13cmに度数が集中している。1類については、聞き気味のものから内湾傾向が顕著なものまでも含めて一括総称したので、度数分布は広がりを見せた。2類の中には、16cmを超える大型のものもみられたが、口縁部の形態・製作・調整方法等は同様であるため、同一範疇内とした。

器高については、4.5~5.5cmに度数は集中しており、1類と3類はほぼ同様相を呈する。2類はやや広がりがあり、器高の極めて高いものと低いものとが、1類や3類に比較すると多くなる。また、口径と器高の比率が比較的接近する割合が高い。

調整については、1類2類はほとんど例外なく、内面は荒ミガキ、外面は口縁部横撫で・体部から底部にかけて荒ケズリを施している。3類は須恵器の模倣タイプであるが、ミガキの施されているものや塗彩されているものなど特殊なものもあり、系譜の違いが考えられる。模倣杯は基本的にはすべて蓋の模倣である。

b、高杯

杯部形態は、体部下半に縁を持つ中期の様相を残すものは減少し、杯部形態分類の1類・2類のタイプや直線的に開いていくものなどの割合が高くなる。縁を持つものも、鋭角さは喪失し丸みを帯びた弱縁のものが多く、模倣杯状のものは1点も確認できなかった。

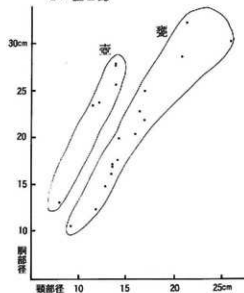
口径の度数分布は13~18cmと広がりがあって、概ね15cm前後を中心とした規格の中に収まってくる。器高は9~10cm、脚部長は4~5cmの度数内に50%以上が集中している。高杯全体のバランスとしては2等身の短胴・短脚タイプものが多いという結果がでており、13.5cm以上の長脚タイプに類するものは1点のみである。また、形態状でも柱部が内湾するものは少なく、直線的乃至外反していくものが多い。

出土した高杯から、いくつかの作成方法が確認できた。まず、杯部と脚部はそれぞれ単独で作成していく。杯部の作成については、底部を仕上げてから体部以上を接合していくものと体部までを仕上げた後から口縁部を接合していくものがある。共通項としては、底部作成の際にはぞを必ず作っている。脚部については、ほぞ受けとなる穴を開かせており、杯部との一体感をより強固にしている。

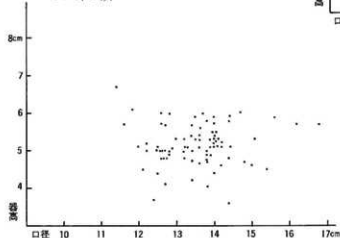
(3) 土師器度分布

杯の口径については、口唇部の突出部（最高地点）を基準点として計測した。壺については、甕の首及とともに長胴化傾向が顕著になってくる時期である。口縁部は長短や傾斜角などが多様性に富むため、胴部のみに焦点をあて、縦幅と横幅の最大部をとり数値比較をした。壺と甕については、問題点も多々あるが頸部最小径と胴部最大幅とから客観的な特徴に迫ってみた。

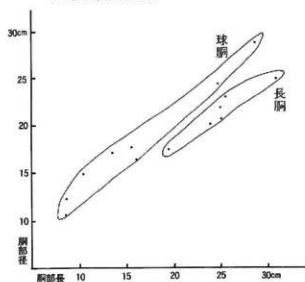
2. 壺と甕



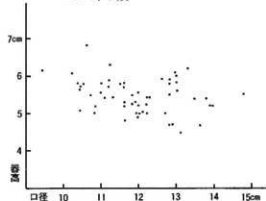
4. 杯 2 類



1. 長胴壺と球胴壺



3. 杯 1 類



5. 杯 3 類 (模倣杯のみ)

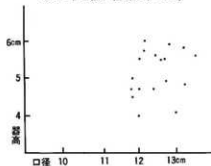


図10 土師器度分布図

c. 壺

総量は41点個体以上あり、規模としても形態的にもバラエティに富む。胴部径と胴部長から球胴型と長胴型とに大別したが、境界線上にあり明確に分類するのが困難なものもある。計測ができたもののみについてであるが、球胴型と長胴型の割合はほぼ半々であり、煮沸施設等の変化に伴う煮沸具の移行過程を呈示しているともいえる。器高が35cm以上を越える大型のものは1点、15cm以下の小型のものは3点のみである。20~30cm規模の中型のものが37点以上で約9割を占める。

d. 壺・鉢

壺は8点であり、35cm以上の大型のものが3点、20~30cm前後の中型のものが3点、20cm以下のものが2点である。極端に左右に胴部が張り出す胴張りタイプが1点あるが、その他は球胴タイプである。小型壺は2点とも丸底であり、形態や調整方法などは埴型のものに類似する。胎土も大型中型のものに比較して、細密且つ精良であり、明らかに意図的に選択した素材を使用していたものと思われる。

須恵器

(1) 須恵器の概要

総量11点の内訳は、甕3点・杯5点・壺3点である。祭祀跡出土土器全体の約3.5%であり、割合としてはかなり低い。すべて破砕されて状態で出土しており、遺物によっては広範囲にわたり散乱している。甕については、3点とも器種が異なっており、出土位置も様々ではない。SF1の北側に偏って出土しており、破砕場所の特定が想定できる。No287は口縁部と頸部との境界付近に明瞭な凸縁を形成する。頸部は充實的に波状文が施されているのに対し、口縁部にはそれが中央付近近になる。頸部が直線的なのに対して、口縁部は緩やかに内弯し口唇部で小さく外反する。No288は、凸縁を境界として口縁部は無のみ、頸部は1単位が大きめの波状文を施す。凸縁は弱後であり、凸縁の上部には凹線が1状巡る。No289は頸部のみであり、No287や288に比較して口縁部がかなり長めになる。細密な波状文が充實的に施されている。杯はほとんどが蓋模倣であり、外面を回転削ケズリにより器面調整を行っている。

壺は使用粘土の違いから、3点とも胎土が異なっている。No281については内面は同心円印きの後、半スリケン調整を施している。外面は口縁部と頸部との境界付近に凸縁が巡り、上下面に沈線が入っている。口縁部・頸部共に波状文が施されるが、胴部は平行印きの後、半スリケン及びハケ状工具による回転削で調整が施されている。No282については内面は同心円印きを施した後スリケン調整を行っている。外面は口縁部は回転削で、胴部は平行印きを精緻に施した後、半スリケン調整により仕上げられている。No283についても同様な手法で行われている。

石製模造品

(1) 特徴及び分類

石製模造品について、種類ごとに形態の特徴及び調整度などについて、付した。

a、剣型

完形品が41点、一部破損が14点の計55点である。基部の特徴をもとに4形式に分類した。

《形態》

1類	基部が丸く、切先も丸みを帯びるもの	11点
2類	基部が丸く、切先が鋭を持つもの	2点
3類	基部及び切先が鋭を持つもの	11点
4類	基部が平滑で、切先が鋭を持つもの	12点
分類不能		20点

破損しているために形態特徴の確認が困難な個体については、数量のみを付記し、分類形態の中から除外した。基本的には4形式の範囲に収めた。1類、2類については基部形状からは同形態である。1類よりも2類のほうが石質の硬度があり、結果的に切先を鋭くしやすい性質である。3類については鋭を長軸の中軸付近に持つものと中軸線からそれるものがある。鋭を有するものは確認できず、概ね表裏面が扁平な筒状化されたものがほとんどである。また、鋭の強弱から強鋭と弱鋭という形で更に細分していくことも可能である。しかし、細分化していく基準という点での問題点も考慮して、あくまでも大別的な分類ということでこのような方法を選択した。したがって、呼称についても、広義に剣型としたが、厳密には別呼称の個体も考えられよう。鋭を有するものは確認できず、概ね表裏面が扁平な筒状化されたものである。

また、縦幅と横幅が計測可能な30点について、2形式に分類した。具体的にはa類とb類とし、a類は（縦幅がかなり長く狭長なものであり、縦幅対横幅の割合が1:1.8以上を示す。）b類は（縦幅と横幅の割合が接近する短型なものであり、縦幅対横幅の割合が1:1.8未満を示す。）a類、b類の範囲に収まるものは15点ずつという結果となり、数量的には均等割れした。b類は、形態分類の3類に比較的多く認められ、Na25やNa47などは、その典型的なタイプである。それに対し、a類は1類や2類に多い。

《穿孔》

1類	基部に偏りぎみに1孔を穿つ
2類	中央部付近に1孔を穿つ
3類	基部に偏りぎみに2孔を穿つ
4類	基部と切先に偏って2孔を穿つ
5類	孔を穿たない

1孔を穿ったものについては、Na44以外は概ね基部に偏りぎみのものがほとんどである。紐を通して、掛ける吊るすという実用性の延長上にあることに起因しているのであろうか。2孔を穿ったものについても、同様に基部に偏りぎみのものの多い傾向が窺える。無穿孔なものについては、厚ぼたたくて仕上げがやや粗雑であるが、製作途中のものではなく、完成品である。孔を穿てないものについては、すべて土器内の底部に置かれた状況で出土しており、製作段階から無穿孔を意識していたものと思われる。

穿孔の方法については、確実に両面穿孔と把握できるものはNa35のみであり、それ以外は片面穿孔である。

《製作及び調整度》

側面については、すべて研磨面取りが施されている。表裏面に対して平行な研磨を若干行い、最後に垂直方向の研磨で仕上げているものが多い。若干硬めの暗灰色を呈するものは、厳密な垂直方向の研磨が全面に施されており、比較的柔らかそうな材質のものについては、平行な研磨が多めになる。表裏面については長軸に対して、ある程度規則性をもった垂直・平行・斜めを基本にした研磨が行われており、50%以上は垂直方向である。尚、表裏面に対する研磨方法については、大きな相違はない。

《石材及び色調》

色調については、4種に大別した。

①類 灰白色 ②類 明緑灰色 ③類 緑灰色 ④類 暗灰色

上に上記の4種類に色調分類できる。全体の6割以上は③類であり、②類も含めると8割以上となり、緑色系の多いことがわかる。

使用されている石材は、すべて滑石の範囲に属するものである。硬度については概ね同一であるが、①類から④類に向かうに従い若干硬度が増すようである。

b、有孔板

個体数は10点であり、部分破損をしているものも2～3点あるが、形状を確認できる範囲内である。

有孔円板と呼称されている範囲に属するものと捉えたが、形態上、不明確なものの存在するので、ここでは有孔板として分類を試みた。

《形態》

- 1類 円形に類似した形状を有する
- 2類 楕円形を有する
- 3類 不整形形を有する

長軸幅を調べてみると、すべて4cm以内の小型なものである。その中も2～4cmと広がり

幅にばらつきがみられ、一律でない。完全に円形に近いものは、No52の1点のみである。全体の形状がかなりくずれてバラエティになり、粗雑な仕上げのものが多い。

《穿孔》

- 1類 中央付近に1孔を穿つ
- 2類 長軸を3等分するように2孔を穿つ
- 3類 両端に偏って2孔を穿つ

1孔を穿つものは1点のみであり、他はすべて2孔を穿っている。穿孔方法については、両面穿孔と確認できるものは、No56の1点のみであり、他はすべて片面穿孔である。No52については、1箇所2回の穿孔を試みたことが、表裏の瓢箪状の形跡から確認できる。左右対称の様相を呈しており、意図的な可能性も考えられる。

《製作及び調整痕》

側面については、すべて研磨面取りが施されているが、No62は大家様であり、仕上げに側面差がある。研磨方向は、表裏面に対して斜めや平行の研磨は若干入るが、基本的には垂直な研磨で仕上げている。表裏面については、短軸に対して平行乃至斜めに研磨を施しているものが多い。

《石材及び色調》

- ①明緑灰色 2点 ②緑灰色 6点 ③暗灰色 2点

厳密には硬軟の差はあるが、滑石の範疇である。

c、勾玉

確認個体数は6個体である。完形品は1個体であり、残りはすべて部分破損しているが、形状確認は可能である。

《形態》

勾玉については、すべて5cm以下の小型なものであるが、そのなかでも約2~4.5cm以上と大きさに相違がある。しかし、分類については大きさはなく形態上から大別した。

- 1類 内側のラインは直線的になり、外側はc字形を呈す
- 2類 内側のラインは緩やかな曲線を、外側はc字形を呈す
- 3類 内側は挟るようなc字形を、外側もc字形を呈す
- 4類 体軀が短く、厚手になる

《穿孔》

例外なく、すべてが単孔である。中心部に穿つものは小型なものに多く、大型なものほど端部に穿つ傾向がある。両面穿孔は1点のみであり、残りはすべて片面穿孔である。

《製作及び調整痕》

側面については、基本的に表裏面に対して垂直な研磨で仕上げが行われている。No65については、内側の曲線を出すために切削による面取りが行われており、その後の研磨仕上げは行われていない。外側の曲線については、研磨面取りで仕上げている。表裏面については、短軸に対して平行及び斜め方向からの研磨を主体としたものが多い。

《石材及び色調》

- ①灰白色 1点 ②緑灰色 4点 ③暗灰色 1点

すべて滑石の範疇である。

d、刀子

完形品1個体、一部破損品2個体である。破損品は鞘部が残存しているものである。

《形態》

薄手で鞘部が細く、小型である。鞘口から鞘尻にかけて徐々に細くなる先細りの形態をとる。No74は、鞘口に方形の突出部を持ち、把元から把頭に掛けて把幅及び厚みに変化は見られない。把の長さがかなり長く全体の2/5を占める。

《穿孔》

No74と同様に他の2点も鞘口付近に孔を穿たれている。すべて1孔と考えられ、穿孔方法は片面穿孔である。

《製作及び調整痕》

側面については、No74は長軸に平行に丁寧な切削面取りが施されており、研磨痕は基本的には確認できない。他の2点は表裏面に対して垂直方向の雑な研磨面取り仕上げを行っている。表裏面については、No74は長軸に平行な切削面取りを、その他の短軸に平行な雑な研磨面取りを施している。

e、楯

《形態及び穿孔》

2点出土しており、長軸が長めのものを1類、短めのものを2類とした。

1類の平面形は長方形の直線的なラインを形成しており、長辺の1辺が緩やかな隆み状の曲線を呈す。2孔を穿っており薄手で中央部付近がやや厚みを増す。2類については、短辺は直線的であるが、長辺は2辺とも内側に挟り込むような曲線ラインを形成する。1孔を穿っており、やや厚手である。1・2類ともに、両端では若干の厚みの相違はみられるが、刃部を作出するような手法はとられていない。

《製作及び調整痕》

側面については、1類、2類ともに調整方法は同一である。表裏面に対して短辺は垂直な研磨面取りを、長辺は丁寧な平行の切削面取りを行っている。表裏面については、短軸に対して

白玉の分類

平行及び斜め方向を主体とした研磨を施す。

f、稜？

《形態》

約1/2の残存であるが、変形を縦長にして丸みを若干帯びた稜？に類似した形状と思われる。

中央部は大きくくり貫いたことが想定される。

《製作及び調整痕》

全体に切削面取りが行われているが、特に内外の側面にその傾向が顕著である。切削後は研磨仕上げが施されている。

g、平縁？

《形態及び穿孔》

平面形は楕円形状のものを中軸付近で半裁したものに類似する。外側は若干破損しているが曲線を描き、内側は直線に近いラインを形成する。外側に比べて内側は薄くなるが、製作直等から意図的な意味あいを感じられる。中央部付近に1孔が穿たれており、片側穿孔である。

《製作及び調整痕》

側面は、表裏面に対して垂直方向の研磨がかなり厳密に行われており、丁寧な仕上げ方である。表裏面は、短軸にたいして平行になる研磨が外側から内側にかけて施されており、内側の器面を薄くする手法がとられている。

h、白玉

《形態》

側面の形状をもとに分類を試みた。厳密にはかなり細別が可能であるが、あくまでも大別ということで、3種類に分けた。

- | | |
|-------------|------|
| 1類 平帯なもの | 912個 |
| 2類 丸みを帯びるもの | 784個 |
| 3類 稜を持つもの | 176個 |

1類と2類とで約9割を占めており、若干1類のほうが多くなる。2類と3類については、稜を持つものがくずれて丸みを帯びてきたのかそれともその逆になるのか、あるいは独自の系譜や工人の違いなどによるものであろうか。稜を持つものは比較的硬めのものが多く、選択し作成した可能性も考えられる。

端部の形状については切断面にポイントをおき3種類に分類した。但し、厳密にはその範囲にいれることが困難なこともあり、傾向分類という点に留めた。①両端面ともに切断乃至切削後丁寧な研磨が施されていない (29.3%) ②片端面のみ研磨が施されている (39%) ③両端面ともに研磨が施されている (31.7%)

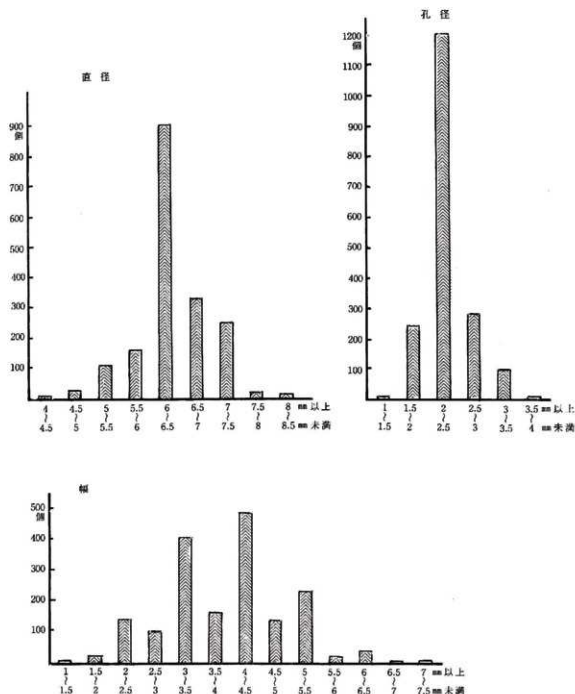


図11 白玉分類図

①のものが②③へのワンステップ前段階のものという捉え方もできよう。

《穿孔》

基本的には片面穿孔であるが、穿孔過程でスムーズにいかなかったものについて、結果的に両面穿孔になっているものと思われる。9割以上が0.15mm以上～0.35mm未満におさまっており、同一規格の錐状工具による穿孔を証明している。

《製作及び調整痕》

側面については基本的に穿孔軸に対して平行な研磨が行われている。2類については、丸みを形成するために穿孔軸に垂直な研磨も施されている。3類については、稜線を中心に両方向からの研磨が施されている。端部については不載方向の直線的な研磨が施されており、若干切削により仕上げられているものもある。

《石材及び色調》

色調については、灰白色・緑灰色・暗灰色に分類でき、概ねは灰白色と緑灰色であるが、暗灰色のものも約6%確認できる。石材はすべて滑石である。

② 製作工程

石製模造品の製作工程については、最終的に研磨仕上げを施している。(一部切削仕上げもある)それ以前の工程については、未完成品が出土していないため、証明することは困難であるが、製作及び調整痕等から何通りかの方法が考えられた。白玉については、第一に原石を荒削りしたものをある程度の管玉状の形にする。それを何等か分に切断し穿孔をした後、形を整え研磨仕上げを施す。第二に原石を荒削りしたものを側面研磨等を実施し、ほぼ仕上げに近い管玉状の形に整える。その後切断して、穿孔を行う。第三に荒削りしたものを側面研磨等を実施し、ほぼ仕上げに近い管玉状の形に整える。その後穿孔をし、何等か分に切断する。第四に荒削りしたものをある程度の管玉状の形にする。穿孔した後、何等か分に切断する。切断したものの形を整え、最後に研磨仕上げを行う。

製作・調整痕等から第一及び第二の過程で作成された白玉が多いと思われる。厚みが0.2mm未満のものについては、石質から見て穿孔後に切削しようとする形状がくずれやすくなる。概ね穿孔前に厚みの決定が行われていると思われる。白玉以外の模造品については、荒削りしたものをある程度の形に整えて、穿孔した後、最後に研磨仕上げを行う。無穿孔の模造品が出土しているが、穿孔の前段階のものと同工程であろう。穿孔したものに比べ、やや雑であるが研磨等により仕上がりに近い状態にまでなっている。

③ 製作及び調整具

製作や調整に使用された工具類については、出土していない。しかし、石製品に残された製作上の痕跡はその存在を証明しており、切削・穿孔・研磨などに使用された工具はかなり精

巧であったことが予測できる。刀子の模造品は研磨を行わずに、切削によりシャープな仕上がりとなっている。白玉も切削による断面ラインの顕著なものを相当数確認できる。模造品を作出していく切り口から金属製の刀子状工具の使用が考えられる。研磨については、砥石状のものを使用していたと思われるが、研磨痕が荒いものと細かいものがあり、何種類かのものを使い分けていたようである。穿孔は先の鋭い錐状工具が使用されていたようである。穿孔径は0.15～0.35mmの中に9割以上は含まれており、同規格の錐状工具を使用して大量に穿孔していたのであろう。

2. 奈良平安

住居跡及び溝跡から出土した遺物がほとんどである。当然のことながら全体に占める須恵器の割合が大幅高くなる。奈良時代では須恵器の壺・蓋や土師器の壺が多く、土師器の杯や盤が若干みられる。平安時代の遺物は9～10世紀にかけてのものであり、須恵器の壺・杯・碗や土師器の壺などの出土が多いが、その他に須恵器の甕・長頸瓶や灰釉陶器の碗・皿・長頸瓶など多様性を極める。

3. 中近世

遺物は溝及び堀から出土しており、15～17世紀に比定できるものである。残存状況が不良であり、すべて破片である。軟質陶器の壺・鉢が多く、そのほか軟質陶器片口、土師質土器皿、鉄絵皿(瀬戸美濃)、陶器鉢(瀬戸美濃)、陶器壺(瀬戸美濃)、陶器甕(在地?)、焼き締め陶器(常滑)、青磁(明)などが出土している。

4. 祭祀跡出土石材

祭祀跡から出土した小礫の石材鑑定をした結果である。砂岩が約5割を占めており、チャートがその次に多く3割を占める。砂岩は鮎川及び鍋川で比較的よく確認できる石材である。祭祀跡出土以外でも、同時期の層内でこの砂岩は多量に確認できる。鮎川や鍋川から持ち込んだとは考えにくく、板鼻層の中に同種の石材が多量に混入しており、長年の浸食作用により斜面から露出したものと思われる。このことは、チャートや流紋岩についても同様なことが言える。ホルンフェルスは石斧であり、出土地点が祭祀遺物出土地点よりも十数m下層からであることから、伝統的な転用物というより時期差の相違の可能性が考えられる。この種の石材の産地が周辺にはないことから、他地域からの搬入品であろう。礫の形状を観察すると角礫はほとんどみられず、角のとれた丸みのあるものが多い。この特徴は丘陵形成後の浸食活動でつくられたものではなく、板鼻層混入時には既に丸みを帯びていたものと思われる。デイサイト質凝灰岩は東館で検出された古墳時代住居跡の竜骨材として、必ずといっていいほど使用されている。石質は非常に柔らかく脆いが、加工や成整形が容易であることから頻繁に使用されていたと思われる。また、近域に産地があることも大きな要因であろう。東館上流を含む観音山丘陵には、

その露頭とところどころで確認されている。

種 類	砂 岩	チャ ー ト 岩	流 紋 岩	珪 質 頁 岩	凝 灰 岩 質 砂 岩	珪 質 変 質 岩	流 紋 岩 質 凝 灰 岩	粗 砂 安 山 岩	デイ サイ ト	石 英 斑 岩	ホル ン フ ェ ル ス	デイ サイ ト 凝 灰 岩	雲 母 石 英 変 質 岩	細 砂 安 山 岩
個 数	220	123	35	32	8	5	4	3	2	1	1	1	1	1
%	50.4	28.2	8.0	7.3	1.8					4.3				

表1 祭祀跡出土石材分類表

第三節 自然科学分析

高崎市寺尾東館II遺跡の火山分析報告書

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

寺尾東館II遺跡の発掘調査では、良好な土層の発掘が認められた。そこで地質調査を行い地質層序の記載を行うとともに、テフラ検出分析を合わせて行って示標テフラの層位の把握を行い、土層の堆積及び遺構の構築年代に関する資料の収集を試みた。地質調査の対象とした地点は、3号礎石（SH1）、ビット44（SA2）、B-5グリッドの3地点である。

2. 地質層序

(1) 3号礎石

ここでは、3号礎石の覆土を観察することができた。礎石の基盤の土層は、下位より黄褐色粘質土（層厚20cm以上）、灰色粘質土（層厚11cm）からなる。礎石の周辺は、亜円礫混じり暗灰色粘質土（層厚17cm、礫の最大径23mm、5層）が認められる。その上位には、下位より暗灰色粘質土（層厚12cm、4層）、亜円礫混じり暗灰色粘質土（層厚47cm、3層）、炭化物混じり暗灰色粘質土（層厚8cm、2層）、亜円礫混じり暗褐色砂質土（層厚53cm、礫の最大径18mm、1層）からなる。（図1）

(2) ビット44

構築年代が不明なこの遺構は、灰色の細粒軽石混じりの暗灰色土（層厚7cm）により覆われている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

上述2地点で採取された土壌試料は14点を対象にテフラ検出分析を行って、示標テフラの分析を試みた。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料5グラムを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80度で高温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。分析の対象としたいずれの試料からも淡褐色の軽石が比較的多く検出された。特に最下位にあり、礎石の基盤の土層にあたる試料番号19にも同じ軽石が検出された。軽石の最大径は12.3mmである。この軽石は、その岩層から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、新井、1979）に由来すると考えられる。従って3号礎石の構築年代はAs-Bの降灰つまり1108（天仁元）年より新しいと考える。尚、本遺跡は1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A、荒牧、1968、新井、1979）の分布の主軸付近に位置しているが、今回分析の対象とした試料からは検出されなかった。このことは、遺構の構築が1783（天明3）年を遡る可能性が大きいことを示唆している。

ビット44の覆土には、As-B起源の軽石（最大径4.9mm）が比較的多く認められた。仮に安定した状態でこの土層が遺構を覆ったものであるならばこの遺構の構築年代はAs-B降灰以降の可能性が考えられる。また、3号礎石と同様に、この土層中にはAs-Aに由来すると思われる白色の軽石は検出されなかった。したがってこの遺構の構築は1783（天明3）年を遡るのかもしれない。

4. 小結

寺尾東館II遺跡において地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、浅間Bテフラ（As-B、1106年）に由来すると考えられる軽石粒子が検出された。そして3号礎石およびビット44の構築はAs-Bの降灰以降の可能性の大きいことが指摘された。また浅間A軽石（As-A、1783年）に由来する軽石粒子が検出されなかったことから、遺構の構築年代は1783（天明3）年を遡る可能性も考えられた。

文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究、第四紀研究、11、p.254—269。
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ、考古学ジャーナル、no157、

荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質, 地研専報, 14, p.1-45

町田洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.

坂口一 (1986) 榛名ニツ岳起源FA・FP層下の土器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312

寺尾館東II遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	層	礫石	
			色	最大径
塚石 3	1	++	淡褐色	5.9
	2	++	淡褐色	5.2
	5	++	淡褐色	7.4
	7	++	淡褐色	9.8
	9	++	淡褐色	9.3
	11	++	淡褐色	6.9
	13	++	淡褐色	3.9
	16	++	淡褐色	5.0
	17	++	淡褐色	3.0
	19	++	淡褐色	12.3
B-5	2	++	淡褐色	3.0
	4	++	淡褐色	3.4
	6	++	淡褐色	10.6
ビット44	1	++	淡褐色	6.9

++++: 多くに多い, ++++: 多い
++: 中程度, ++: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位はmm.

表2 テフラ検出分析結果



寺尾館東II遺跡塚石3 覆土の上層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

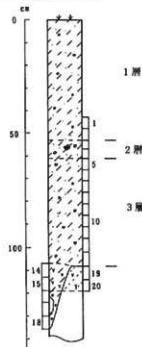


図12 礫石3柱状図

第四節 まとめ

(1) 祭祀跡周辺の地形

祭祀跡が検出された周辺の地形を概観すると祭祀跡は雁行川左岸丘陵中腹の上位段丘面に位置する。この段丘は東西に数百メートルの拡がりを呈している。微視的には祭祀跡が検出された地点は、上位段丘面の南側に位置し、地形が緩やかに南東方向へ傾斜していく変換点でもある。東脇は小支谷状の沢になっており、顕著ではないが水が湧出しているような状況である。北東方向200mの位置には神奈備形を呈する小坂山を近望する。東からの小坂山の雄姿は秀麗な円錐形を呈しており、一見独立峰的に見えるが、観音山丘陵の一部が突出した部分に相当する。祭祀跡の検出された南西方向からの小坂山の眺望は丘陵の末端の様相であり、隠れた円錐形とは認められない。祭祀跡の北側を景道金井高崎線から分岐した市道が走行しており、小坂山と観音山丘陵との不明瞭な括れめを通過して祭祀跡と反対側の石原町につながっている。この道路は若干の軌道修正は行われているが、古来から使用されてきた道と思われる。道に沿って釈迦堂ヤツと呼称されている支谷が展開していたようである。現在は埋没しているがところどころに水が湧出している。この道を境にして南側は緩傾斜地に北側はかなり急峻な地形になる。本遺跡の眼下には標高が10~15m低い地点を雁行川が東流している。暴れ川と言われてきた当時の雁行川の下向浸食は顕著であったと考えられることから、当時は現在よりもかなり標高の高い地点を河川は走行していたと思われる。

(2) 遺構の概要と遺物の出土状況

掘り込みや土壇状のたかまりは確認できなかったが、地山は削り込んでいたものと思われる。明瞭に遺構のラインが確認できるほど顕著なものではなく、遺物の設置を容易にするために削平したような状況であろう。傾斜面を全くの平坦にしてはではなく、若干緩やかにした程度の削平である。その後地山部を掘り起こすか、土盛りをするなどの更に設置上の安定を考えた工作を加えた可能性は高い。遺構の拡がりの範囲については検出することはできなかったが、遺物の拡がりとはほぼ一致するものと思われる。

遺物は置かれたような状況であるが、設置していく上での細かな状況の把握はできない。壺・甕等の大型な遺物については初期段階に設置していたようである。また、最下層の土器の更に下層から白玉が出土している。20点以上あり、出土状況や土層の様相から鑑みて流れ込みとは考え難く、設置の初期段階で白玉の供献が行われていたと思われる。

壺・甕類は、規模や形態差により設置状況に若干の相違があったものと思われる。規模の大きいNo242・268などについては土器内の底部から石製機造品は出土していないが、それより内側に配列されたNo248・258などのやや小型のものについてはその底部から出土している。No271は内面に炭化物付着の痕跡が散見でき、土器の大きさや種類により、配列や器内における

ものを区別していたと考えられ、儀器としての用途が分類されていた可能性を想定させる。

土器内に置かれた石製模造品の出土状況は様々で、重なりのある土器、単独の土器の区別なく土器内より出土している。重なりのある土器は同時期もしくは極めて短期間の中でいかに置かれたものである。3～9枚に重なっている土器の中に上下の関係なく模造品が供えられている。それは、一連の重なりのある土器内すべてに入っている場合もあれば、そうでない場合もあり規則性は掴みがたい。その重なりが同時性があるものかそれとも時間差があるものかによっても模造品の置かれた意味に大きな差異が生じるものと思われる。土器内に置かれた模造品は壺・甕・杯のみだけでなく、鉢や高杯内にも確認されている。全器体内より出土しているが、土器内に供献された模造品の数量や種類が個々の遺物により異なっており、祭祀行為としての目的の相違が感じられる。また、確認できた中で、石製模造品の遺物内に供献された数は千個体を越える。これは、祭祀を執り行ううえで、土器内に石製模造品を入れていくという行為が、ここでは一般的な形で儀式化されていたということを示唆する。

(3) 祭祀の回数

遺物出土状況を鉛直面から確認していくと、祭祀行為の回数を複数回と想起させる地点がある。たとえば、胴上半部が割れてしまっているNo248やNo268の上部には明らかに設置されたと思われる杯が数枚の単位でっており、間に5cm以上の粘土土を挟んでいる。壺は胴上半部は残存していないが、下半部は当時の設置した状態のままであった。その上部にはほぼ水平に近い安定した状況で杯がのっていた。杯と壺を同時期設置と仮定した場合、堆積状況も含めて、杯が移動して壺上部のつたとは捉え難く、時間差を置いて杯の供献が行われた可能性が高い。祭祀行為が2回以上行われていたことを示唆するものであろう。但し、上部の遺物と下部の遺物とは形態状大きな違いはみられず、土器形式の同一範囲内に収まる。したがって、傾斜地で土砂が比較的堆積しやすい状況をも考えると、1回目とその他の祭祀行為との時間幅に大きな差がなかったことを物語っているともいえる。

(4) 祭祀の対象

遺物の配列は、損傷が顕著で当時の状況を復元するのは困難であるが、大まかな配列の傾向性や規則性はよみとれる。壺・甕等の大型なものについては遺構のコアとなる部分を構成していたことが想定できる。祭祀跡の規模は南北方向が長めになるが、その長軸線と大型の壺・甕が結ぶ南北方向のラインとはほぼ平行に近くなる。そのラインは、北東方向を向き、覆土小坂山に正対するようになる。また、祭祀跡の東脇には柱穴が2本検出されているが、竪土中より祭祀跡出土と同形式の杯や壺の破片が出土している。1号柱穴と2号柱穴を結ぶラインは祭祀跡と小坂山にほぼ正対するような状況である。このようなことから祭祀跡と小坂山との関連性

が浮上してくるが、神奈備形の山に囲む祭祀跡としては、その山の秀麗な方向から祭祀を執り行う例が多く、本遺跡の場合については、やや斜に望むような位置にある。もし小坂山の祭祀と仮定すれば、方向的には異例の地点ともいえる。視点を変えれば、祭祀行為が検出地点で行われたのか、それとも他で行われて運ばれてきたのかということにまで言及していく。検出状況からそのことを証明するのは困難であるが、意図的に設置したような並べ方は、当地で祭祀行為のあったことを濃厚にしている。祭祀跡のすぐ東脇は支谷状の状になっており、水が常時湧き出すような状態である。また南側の眼下には、雁行川が東流している。小坂山を神の依代として祭祀が執り行われたかは別として、山と水源とは一体の関係にあることから、祭祀の対象を一元的ではなく多元的に捉えていく必要があろう。

(5) 祭祀と集落

本遺跡が位置する雁行川の左岸では、祭祀遺構と当該期にあたる遺構や遺物については、調査区外では確認できない。調査区内においても西は1区西脇の市道から、東は31号溝が流れ込んでいる支谷までの範囲内で確認されているのみである。市道付近は旧地形では支谷になっていたようである。本遺跡では4軒の住居跡が検出されており、雁行川の対岸に目を移すと寺尾中台遺跡で4軒の住居跡が、館台周辺のサンプリングで遺物片が数点、確認されている。6世紀後半になると本遺跡と寺尾中台遺跡では住居跡が2倍以上確認されていることからすると分布状況はかなり疎である。古墳前期・中期の遺構が検出されていないことから館地区周辺では、当該期に入植・開墾を開始したことが考えられよう。

ところで、本遺跡で検出された住居跡は、残存状況は悪いが3件については竈とともに煮沸具や什器も出土しており、食住としての生活が営まれていたことが想定できる。直接的な祭祀跡との関連性については推定の域をでないが、15号住居跡については祭祀跡に数メートルとあまりにも近接しており祭祀に関連した特別な遺構と想定することもできる。竈が西に造りつけられており、その他の住居跡はすべて北竈か東竈ということからも、祭祀跡との関連性を感じさせる一因因ではある。それぞれの住居跡は10m以上の距離を置いており、一連の集落として捉えるかは南北方向に目的な調査が行われなければ、言することは困難である。調査区南北のサンプリング調査では、遺物の確認はあまりされていない。特に南側の下位段丘面については、雁行川の氾濫の影響もあり、遺構の拡がりなどはほとんどないと思われる。遺構の検出状況等から雁行川左岸における当該期の住居数はかなり少なく、集落という点では雁行川右岸の館台や寺尾中台も含めたエリアで考えていく必要があろう。

尚、蛇足ではあるが、小坂山を隔てた反対側には5世紀後半の築造と考えられている三角塚古墳があり、墓域や集落等との関連性という点も今後の検討課題となろう。

参考文献

- 東日本埋蔵文化財研究会(1993年) 古墳時代の祭祀 第I・II・III分冊
 新編 埼玉県史(1981年) 資料編2
 群馬県史(1986年) 資料編2 原始古代2
 富岡市(1987年) 富岡市史 自然・原始・古代・中世編
 藤岡市史(1993年) 資料編 原始・古代・中世
 群馬県埋蔵文化財調査事業団(1986年) 下佐野遺跡II地区
 群馬県埋蔵文化財調査事業団(1989年) 八丈大道上遺跡
 群馬県埋蔵文化財調査事業団(1988年) ミツ寺I遺跡
 群馬県埋蔵文化財調査事業団(1988年) 群馬の考古学 創立十周年記念論集
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団(1995年) 城北遺跡
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団(1993年) 水利土堀の内・林光寺・根切遺跡
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団(1992年) 研究紀要第9号 出現期模倣杯の検討(一)
 松本市教育委員会(1994年) 松本市高宮遺跡
 松前町教育委員会(1993年) 出作遺跡
 群馬県教育委員会(1990年) 舞合・西大室丸山遺跡
 群馬県教育委員会(1969年) 高崎市大八木井野川遺跡
 前橋市埋蔵文化財発掘調査団(1994年) 大屋敷遺跡II
 高崎市教育委員会(1994年) 浜川芦田戸遺跡III
 茨川市教育委員会(1988年) 中筋遺跡第二次発掘調査 概要報告書
 茨川市教育委員会(1993年) 中筋遺跡7次発掘調査報告書
 国立歴史民族博物館(1985年) 研究報告第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」
 群馬県立博物館(1995年) 第一回企画展 源の正倉院沖ノ島
 齊宮歴史博物館ほか(1994年) 三重県の祭祀遺跡
 小山市立博物館(1989年) 第二十回企画展 六世紀の村
 宗像神社復興期成会 沖ノ島(吉川弘文館)
 祭祀考古学会(1994年) 祭祀考古創刊号
 小出義治(1990年) 土師器と祭祀(雄山閣)
 清水豊(1991年) 群馬考古学手帳 群馬県上井手遺跡出土の祭祀遺物
 石野博信ほか(1991年) 古墳時代の研究3 生活と祭祀(雄山閣)
 岩崎卓也ほか(1993年) 古墳時代の研究6 土師器と須恵器(雄山閣)
 白石太一郎ほか(1992年) 古墳時代の研究12 古墳の造られた時代(雄山閣)
 小田富士雄ほか(1991年) 季刊考古学第24号 土器からよむ古墳社会
 寺沢知子(1986年) 季刊考古学第16号 古墳時代の社会と変革

第五節 遺構実測図 1. 1号・2号祭祀跡 (1) 礎・家・跡等

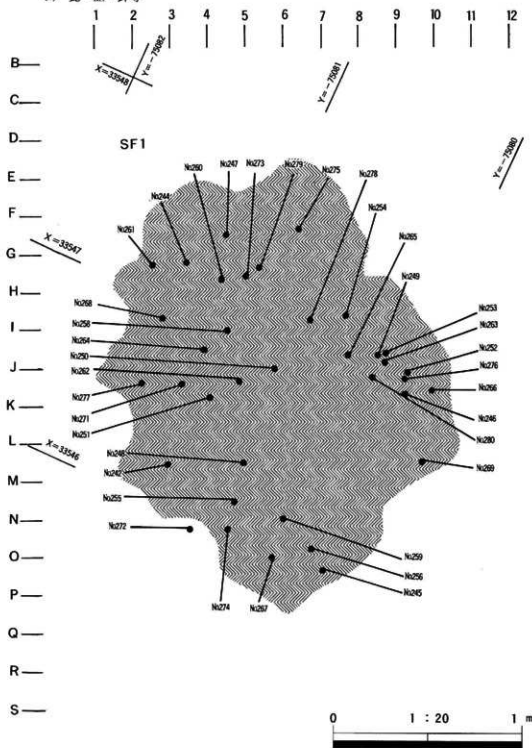


図13 祭祀跡模式図(1)

(2) 高 杯

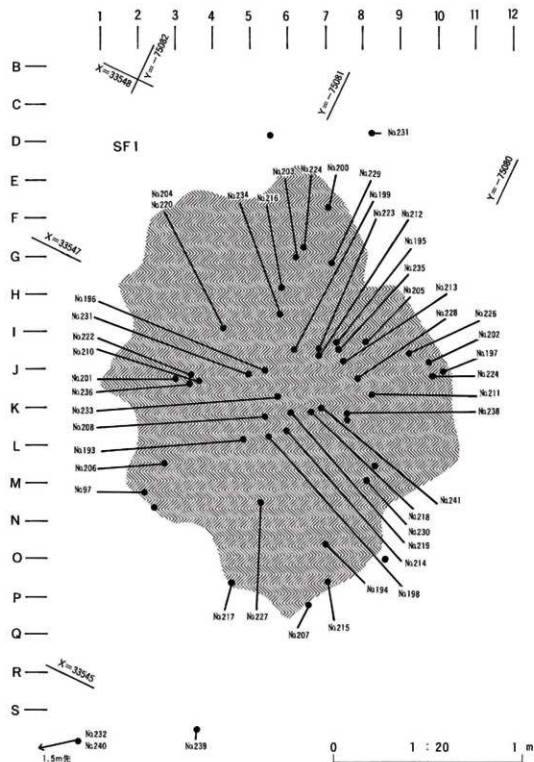


図14 祭祀跡模式図(2)

(3) 須恵器及び2号祭祀跡出土遺物

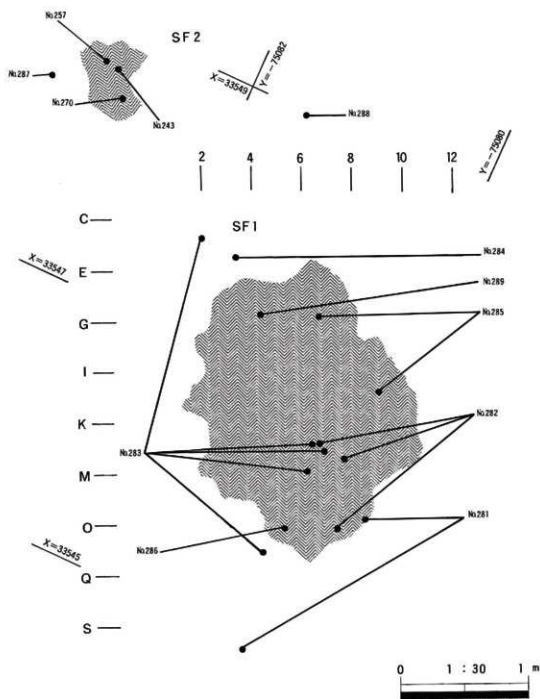
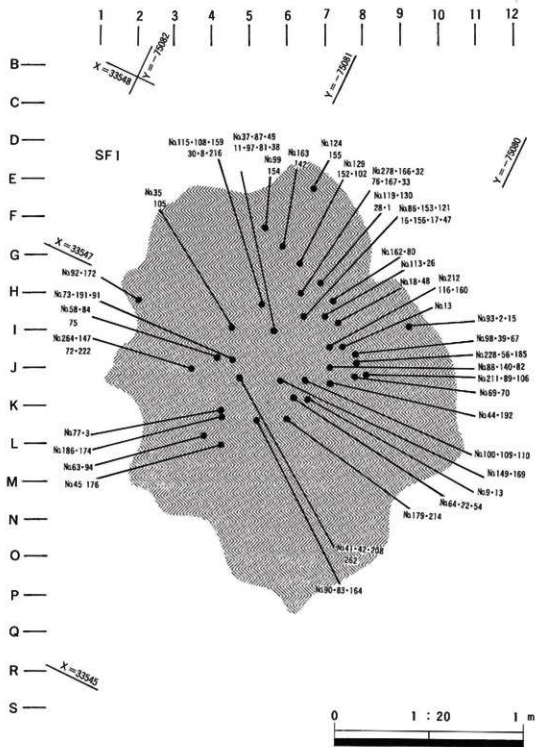


図15 祭祀跡模式図(3)

(4) — ①

同地点で2枚以上の重なりがあり、新旧確認できるまとまりの遺物



(4) — (2)

本ページで表した実測図は、出土時の上下関係である。

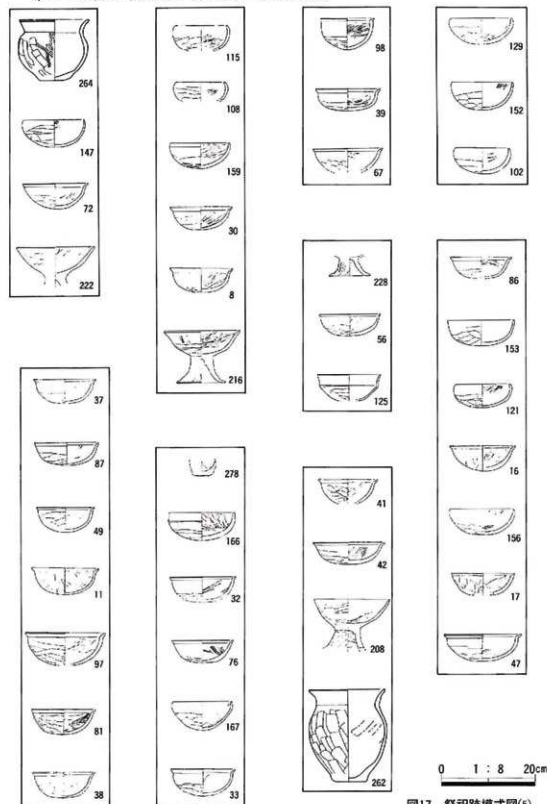


圖17 祭祀跡模式図(5)

(5) 石製模造品

◎番号のないものは実測しておらず、器種についてはAは剣型、Bは不明である

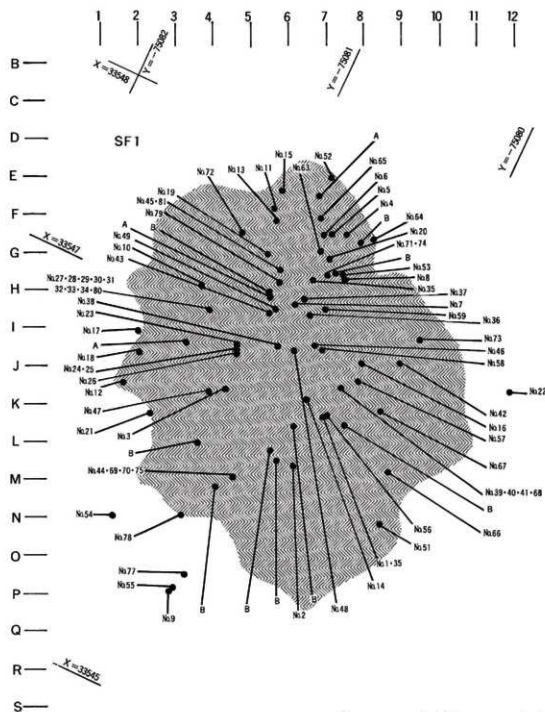


図18 祭祀跡模式図(6)

(6) 白 玉

算用数字は、20cmグリッド内の出土数を表す

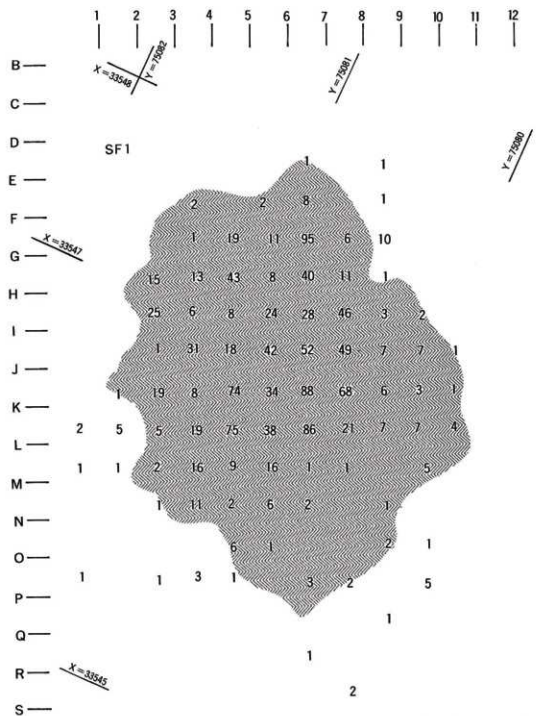


図19 祭祀跡模式図(7)

(7) 祭祀跡エレベーション・セクション図

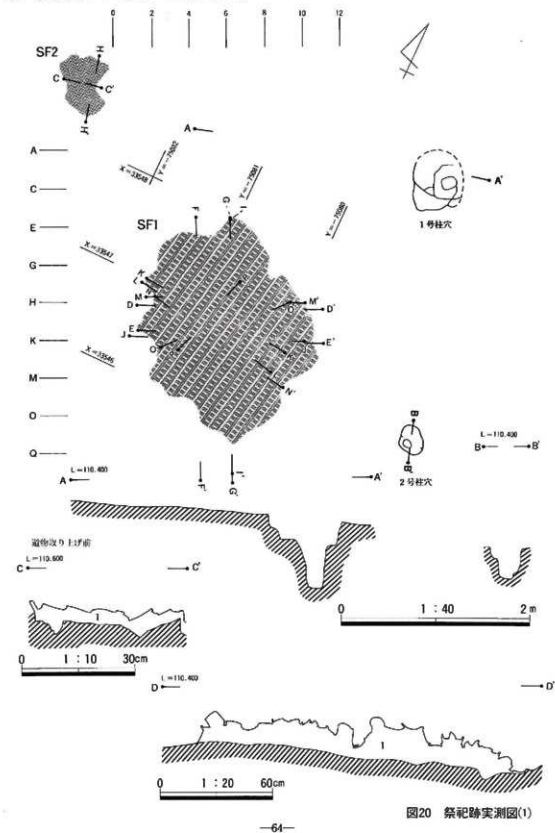


図20 祭祀跡実測図(1)

L = 110.400
E ←

→ E'

L = 110.400
F ←

→ F'

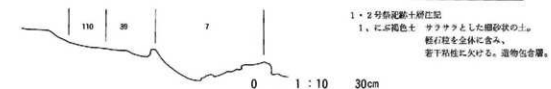
L = 110.400
G ←

→ G'

遺物取り上げ後
L = 110.400 数字は土器番号を表す
H ←

→ H'

0 1 : 20 60cm



1・2号祭祀跡土壇位置
1. にぶ褐色土 サラサラとした細砂状の土。
軽石層を全体に含み、
若干筋状に欠ける。遺物伝承層。

L = 110.400
I ←

→ I'

L = 110.400
J ←

→ J'

L = 110.400
K ←

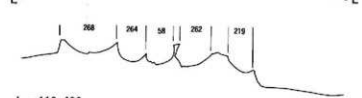
→ K'

0 1 : 20 60cm

図21 祭祀跡実測図(2)

L=110.400

L=



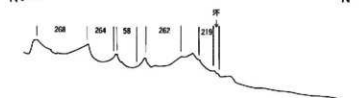
L=110.400

M=



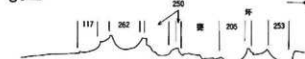
L=110.400

N=



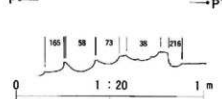
L=110.400

O=



L=110.400

P=



2. 7号土坑

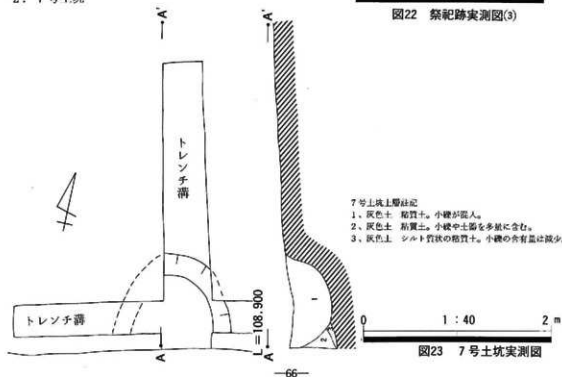


図22 祭祀跡実測図(3)

7号土坑上層註記

1. 灰色土 粘質土。小礫が散在。
2. 灰色土 粘質土。小礫や土器を多量に含む。
3. 灰色土 シルト質状の粘質土。小礫の含有量は減少。

図23 7号土坑実測図

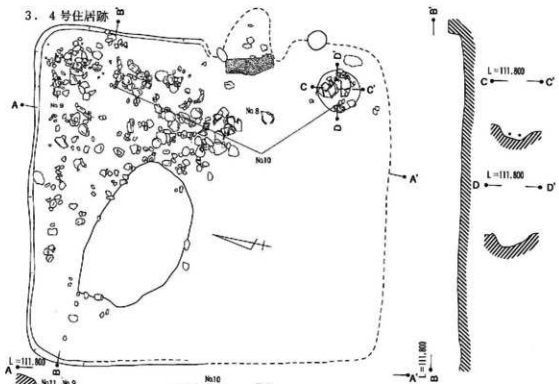


図24 4号住居跡実測図

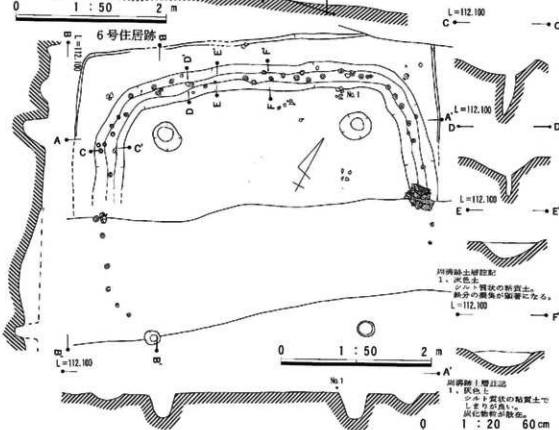
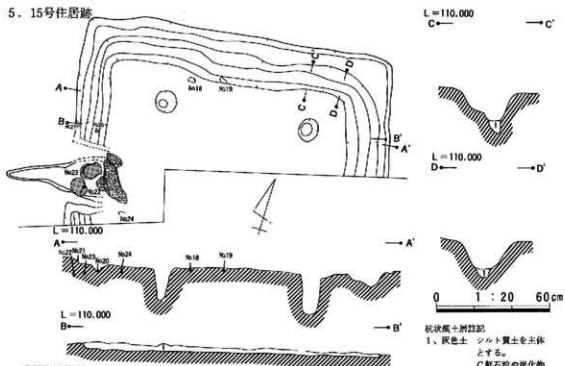


図25 6号住居跡実測図

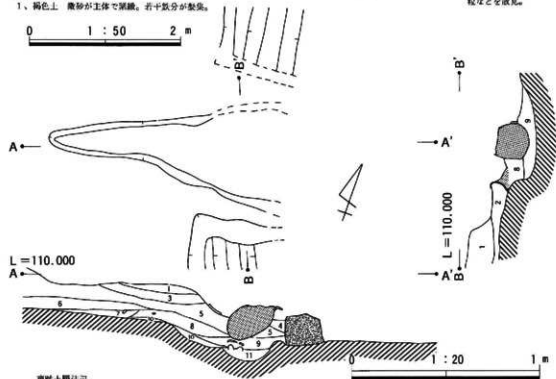
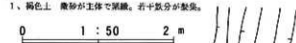
6号住居跡上層註記

1. 灰色土 シルト質状の粘質土で、小礫が散在。
2. 灰色土 シルト質状の粘質土。小礫の含有量は減少。

5. 15号住居跡



生垣跡十層図記
1. 褐色土 腐葉が主体で腐葉。若干鉄分が散見。

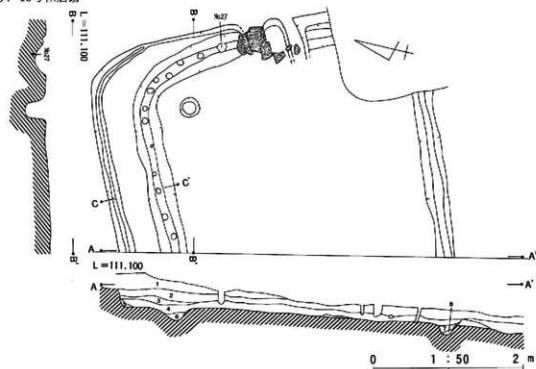


南側土層図記

1. 灰白色土 灰砂を含むが、しりほは多い。礫石が相当量散入。一層に類似するが、炭化物散見。
2. 淡褐色土 細砂状の土質。炭が散入。
3. にお赤褐色土 粘性は欠けるが、しりほは多い。礫石や炭化物が散入。
4. 淡黄色土 3層に類似するが若干しりほが増す。
5. 灰褐色土 鉄分が全体に散見。焼土が下層で顕著。
6. 褐色土

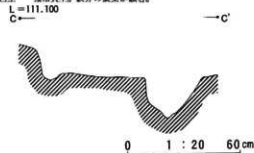
7. 淡赤褐色土 焼土及び礫石を散見。
8. 褐色土 7層に類似するが、礫石の含有量が増す。
9. 灰白色土 礫土や灰。炭化物などの散入。
10. 黄褐色土 土に焼土を含むが、小礫も散見。
11. 灰白色土 腐葉。シルト質土でしりほが多い。炭化物や細土粒が散入。

6. 16号住居跡



内庭跡土層図記

1. 灰褐色土 粉質土でしりほが多く、C 礫石に類似した礫石が散入。
2. にお灰白色土 1層に類似するが、鉄分の散見が顕著になる。炭化物を散見。
3. 褐色土 シルト質土でしりほが多く、鉄分が全体に散見。
4. 灰白色土 3層に類似するが、鉄分の散見が若干増す。
5. 灰白色土 無筋質土。シルト質でしりほが多い。
6. 灰白色土 シルト質状の粉質土。炭化物や細土粒が相当量散入。
7. 淡赤褐色土 微砂状の粉質土。鉄分の散見が顕著。
8. 灰黄色土 腐葉土。鉄分の散見が顕著。



内庭跡土層図記

1. 灰白色土 微砂状の粉質土。
2. 褐色土 炭化物や礫土粒などが散入。
3. 褐色土 シルト質土で粘性が多い。
4. 灰黄色土 炭化物や礫土粒などの含有量が顕著。

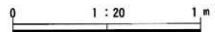


図27 16号住居跡実測図

図26 15号住居跡実測図

7. 14号住居跡

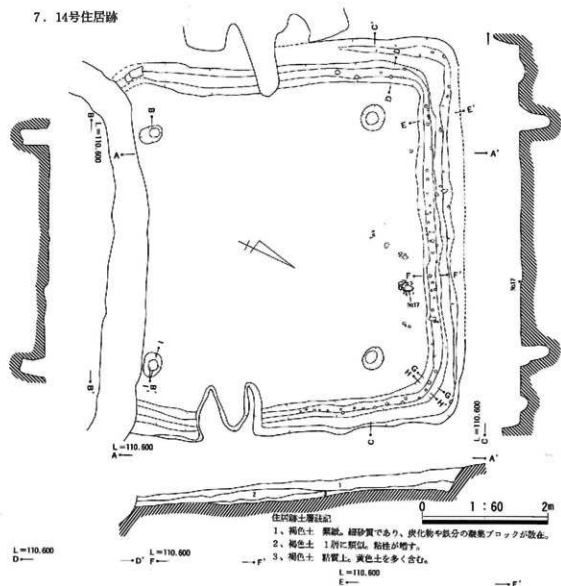
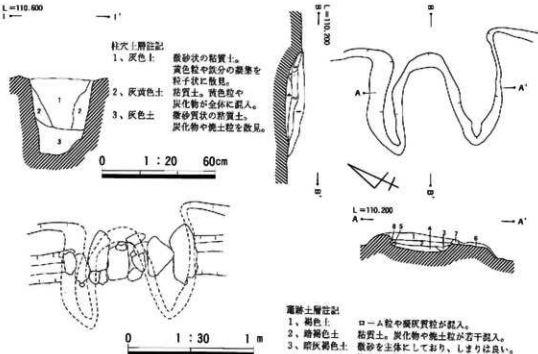


図28 14号住居跡実測図(1)

L=110.400



8. 22号住居跡

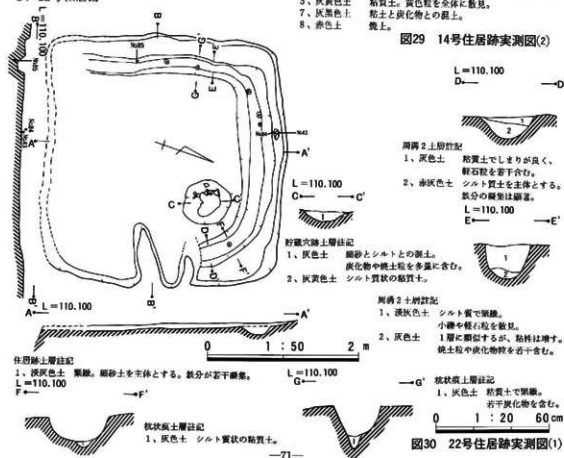


図30 22号住居跡実測図(1)

遺跡上層計

1. 赤褐色土 層状状の上を主体とする。炭や焼土層、炭化物などを全体に散入。

9. 17号住居跡

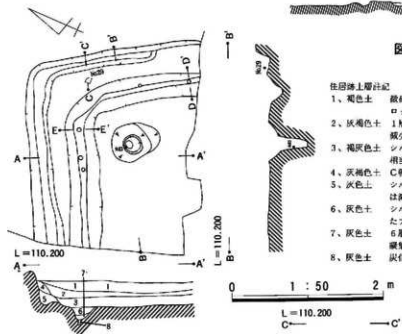


図31 22号住居跡実測図(2)

住居跡上層計

1. 褐色土 炭砂状の礫石が全体に散入。炭分の層状をブロック状に散見。
2. 灰褐色土 1層に類似するが、炭分の層状や礫石は減少。炭化物の含量が増す。
3. 褐色土 シルト質土で主体となる。焼土粒や炭化物が相対的に散見。
4. 灰褐色土 C層に類似した粗砂が全体に散入。
5. 赤褐色土 シルト質土の粗砂土でまじりが多い。礫石は減少し、炭化物の含量が増す。
6. 灰褐色土 シルト質土の粗砂土。炭化物や炭分の散見したブロックを散見。
7. 灰褐色土 6層に類似するが、若干粒性が粗す。炭分の層状は少なく、砂粒もほとんど散見できない。炭化物や焼土層を含有する炭砂質土。
8. 灰褐色土

10. 21号住居跡

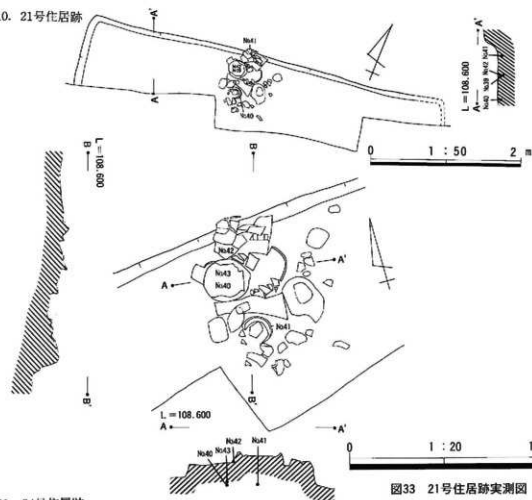


図33 21号住居跡実測図

11. 24号住居跡

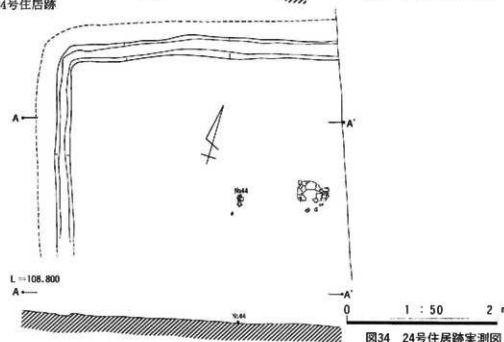
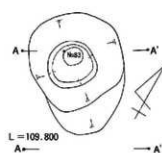


図34 24号住居跡実測図



柱穴跡土層計

1. 赤褐色土 炭砂質土で若干粒性に欠ける。炭分は薄く散見。まじりは多い。炭分の散見は散見。
2. 赤褐色土 2層に類似するが、若干炭分の散見は散見。
3. 赤褐色土 散見土でまじりは多い。小礫を散見。
4. 灰褐色土 4層に類似するが、粒性は粗す。焼土粒や炭化物粒など散入。
5. 灰褐色土

両層土層計

1. 灰褐色土 若干粒性に欠ける細砂質土。炭分の散見は散見。

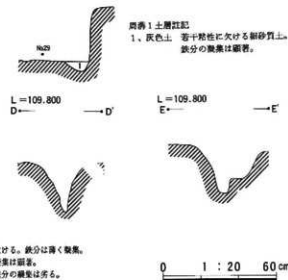
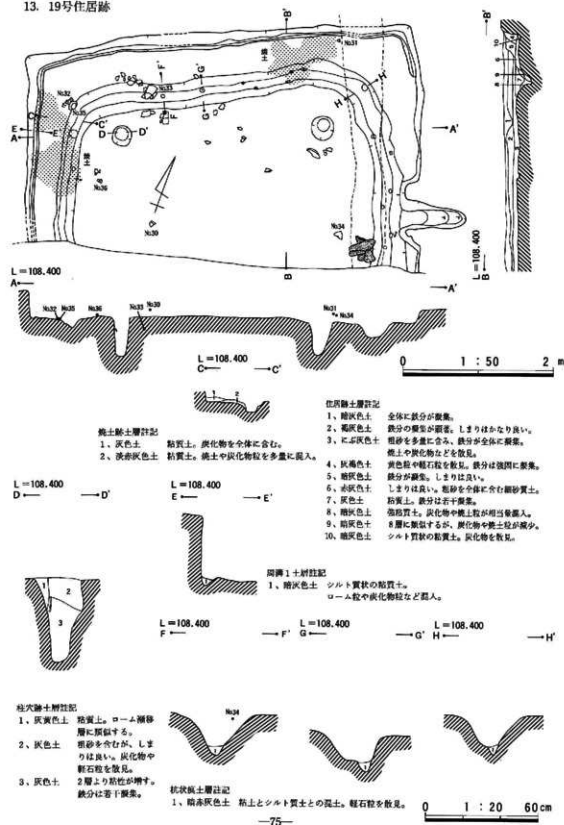
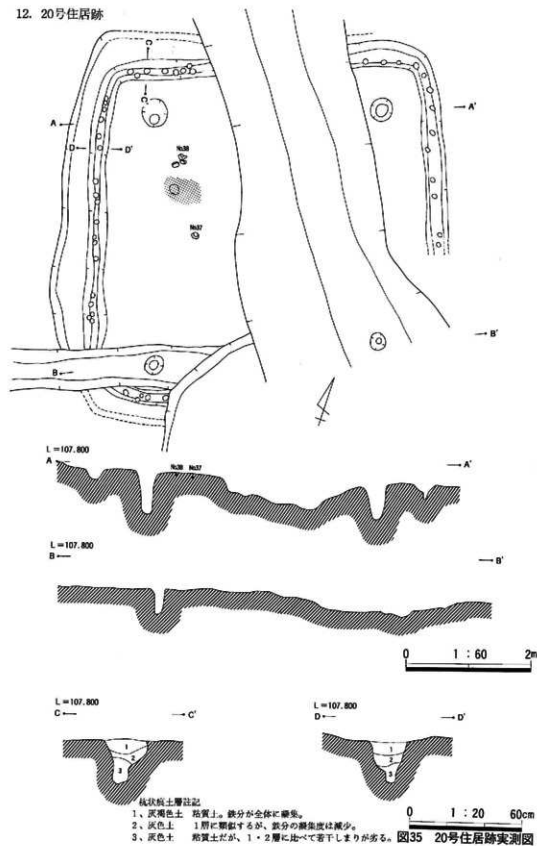


図32 17号住居跡実測図



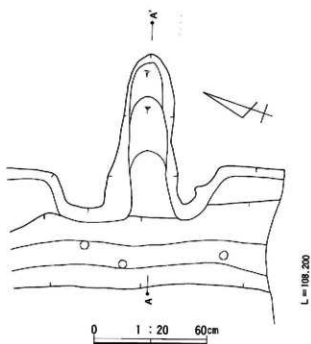


図37 19号住居跡実測図(x)

14. 26号住居跡

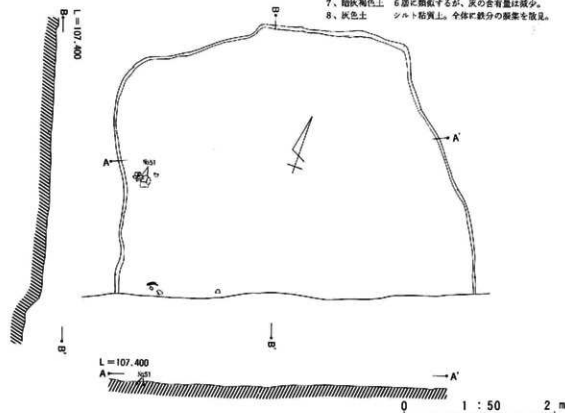


図38 26号住居跡実測図

15. 25号住居跡

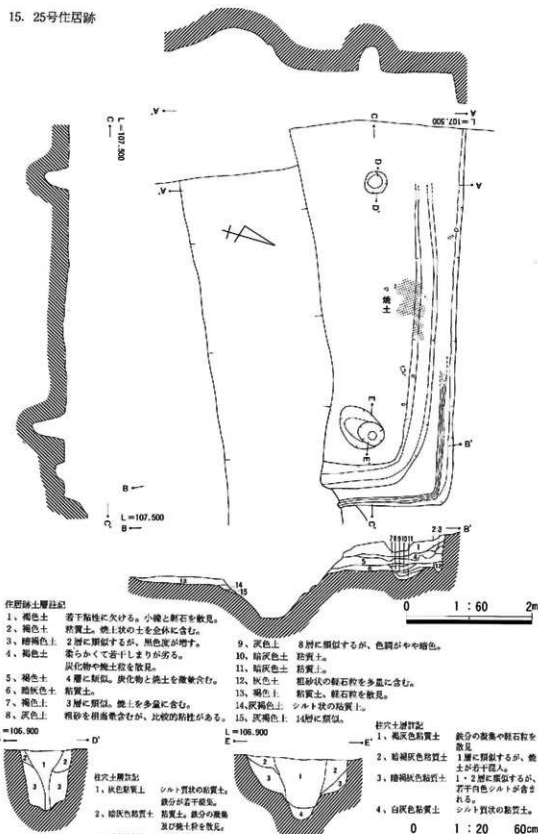


図39 25号住居跡実測図

遺跡上層土記

- 1、暗灰色土 鉄砂質土。全体が鉄分が小ブロック状に散見。黒砂を主体としており、若干粘性に欠ける。焼土粒が散入。
- 2、灰色土 暗砂質土。灰や粘土の小ブロックを含む。
- 3、暗赤褐色土 焼土を主体とし、灰や炭化物も散入。
- 4、赤褐色土 灰を主体とするが、焼土粒や粘土も散入。
- 5、灰色土 灰質土。焼土粒や炭化物を全体に多量に含む。
- 6、灰褐色土 6層に類似するが、灰の含有量は減少。
- 7、暗褐色土 シルト粘質土。全体に鉄分の散見を認む。
- 8、灰色土

住居跡土層土記

- 1、褐色土 若干粘性に欠ける。小塊と黒石を散見。
- 2、褐色土 粘質土。焼土状の土を全体に含む。
- 3、暗褐色土 2層に類似するが、黒色度が暗ずる。
- 4、褐色土 赤かなくて若干粘性が劣る。
- 5、褐色土 炭化物や焼土粒を散見。
- 6、暗褐色土 4層に類似。炭化物と焼土を散見含む。
- 7、暗褐色土 粘質土。
- 8、灰色土 3層に類似。焼土を多量に含む。
- 9、灰色土 暗砂を組織散見するが、比較的粘性がある。

住居跡土層土記

- 1、暗褐色土 粘質土。鉄分が若干散見。
- 2、暗褐色土 粘質土。鉄分の散見及び焼土粒を散見。
- 3、灰色土 1層に類似。

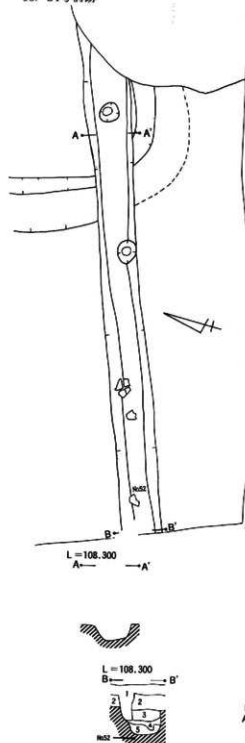
住居跡土層土記

- 9、灰色土 8層に類似するが、色調がやや暗い。
- 10、暗褐色土 粘質土。
- 11、暗褐色土 粘質土。
- 12、灰色土 粗砂状の鉄石粒を多量に含む。
- 13、褐色土 粘質土。鉄石粒を散見。
- 14、暗褐色土 シルト状の粘質土。
- 15、灰色土 14層に類似。

住居跡土層土記

- 1、暗褐色土 鉄分の散見や鉄石粒を散見。
- 2、暗褐色土 3層に類似するが、焼土が若干散入。
- 3、暗褐色土 1・2層に類似するが、若干白色シルトが含まれる。
- 4、白灰色土 シルト状の粘質土。

16. 24号溝跡



溝跡土層記号 図40 24号溝跡実測図

1. 灰緑色土 A層石散入。
2. 田跡作土 粘質土。炭分を多量に含む。
3. 褐色土 粘質土。炭分を多量に含む。
4. 褐色土 3層に類似、形が異なる。
5. 褐色土 粘質土。炭分の割合が異なる。

17. 2号住居跡

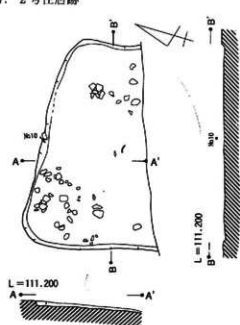
住居跡土層記号
1. 褐色土 炭分が異なる。
2. 褐色土 粘質土。炭分が異なる。

図41 2号住居跡実測図

18. 1号住居跡

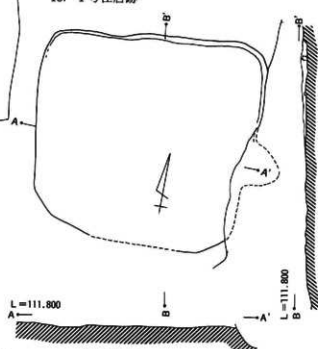
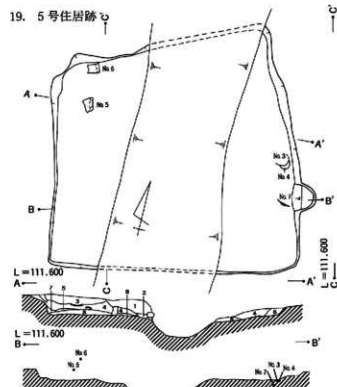
住居跡土層記号
1. 褐色土 炭分が異なる。
2. 褐色土 粘質土。炭分が異なる。

図42 1号住居跡実測図

19. 5号住居跡



- 住居跡土層記号
1. 灰黄色土 炭分と小礫を主体とする。
2. 灰褐色土 シルトと細砂との混入。
3. 褐色土 細砂を主体とする。C層石が散入。
4. 灰褐色土 粘質土。炭分と小礫を多量に含む。
5. 灰褐色土 炭分。4層に類似。炭分の割合が異なる。
6. 褐色土 粘質土。炭分を多量に含む。粘性は異なる。C層石が散入。
7. 褐色土 粘質土。炭分を多量に含む。粘性は異なる。C層石が散入。
8. 灰褐色土 炭分と小礫を主体とする。

0 1 : 50 2 m

図43 5号住居跡実測図

20. 7号住居跡

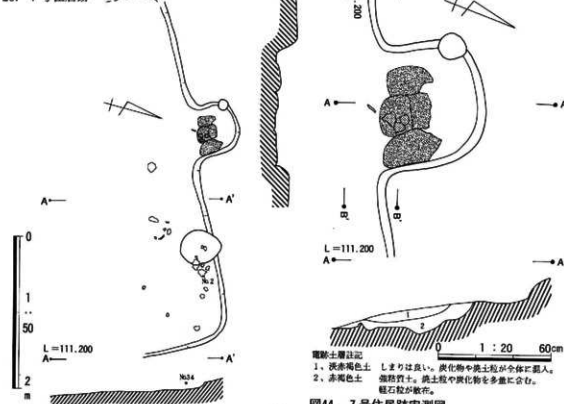
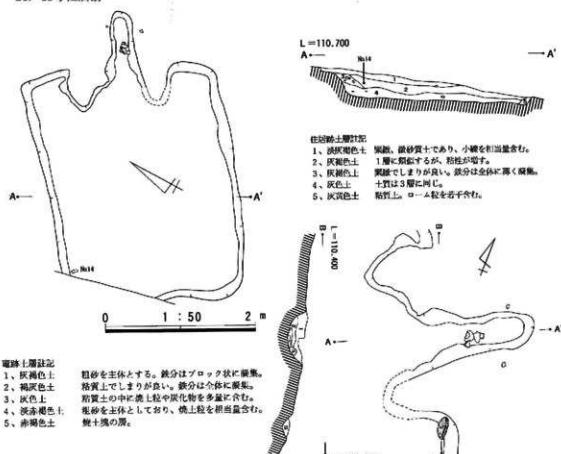
住居跡土層記号
1. 灰褐色土 炭分と小礫を主体とする。
2. 灰褐色土 粘質土。炭分を多量に含む。
3. 灰褐色土 粘質土。炭分を多量に含む。
4. 灰褐色土 粘質土。炭分を多量に含む。
5. 灰褐色土 粘質土。炭分を多量に含む。

図44 7号住居跡実測図

21. 13号住居跡



22. 23号住居跡

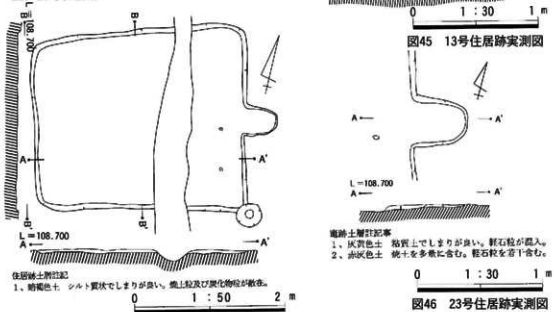


図45 13号住居跡実測図

図46 23号住居跡実測図

23. 18号住居跡

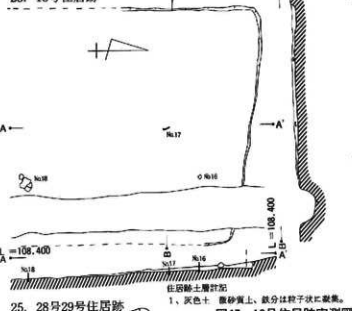
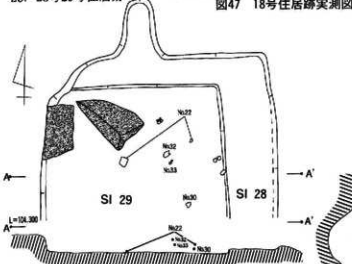


図47 18号住居跡実測図

25. 28号29号住居跡



26. 30号住居跡

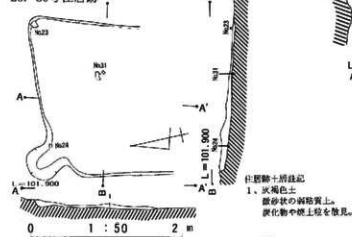


図49 28・29号住居跡実測図

24. 27号住居跡

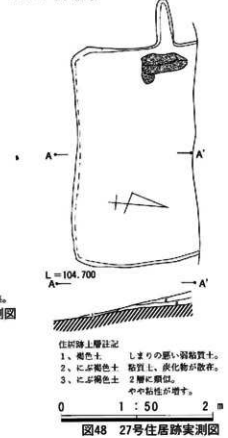


図48 27号住居跡実測図

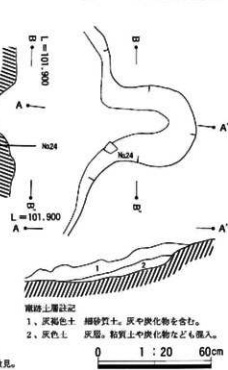
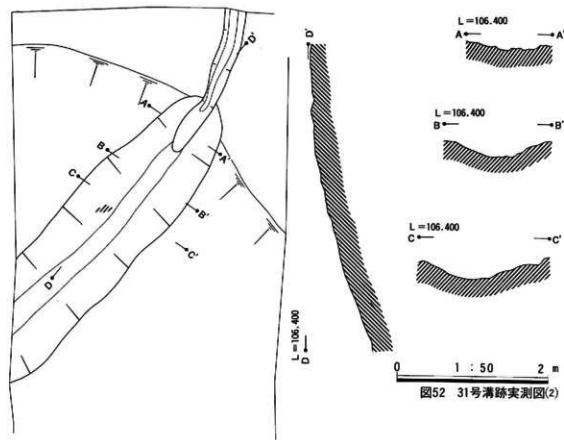
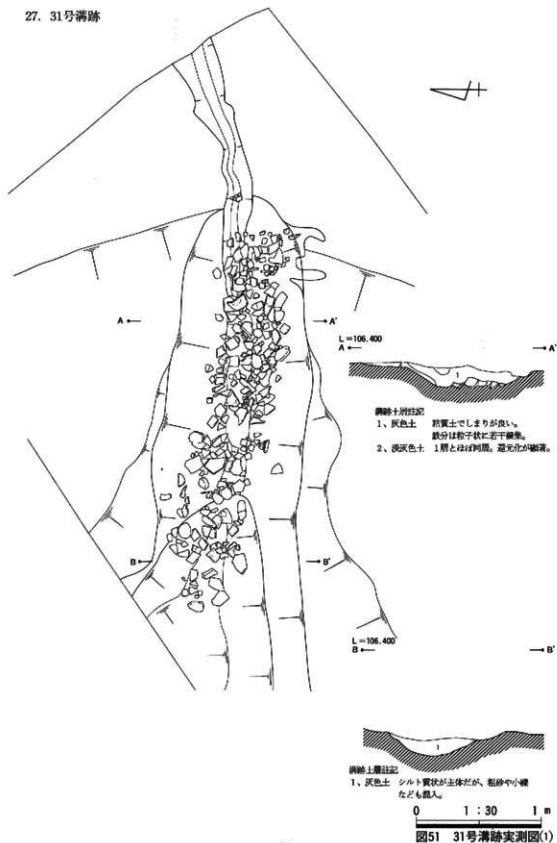
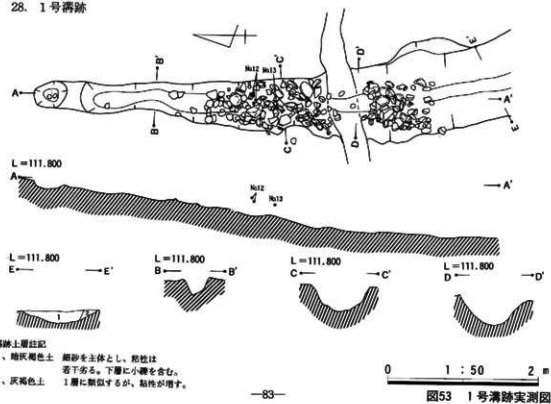


図50 30号住居跡実測図



28. 1号溝跡



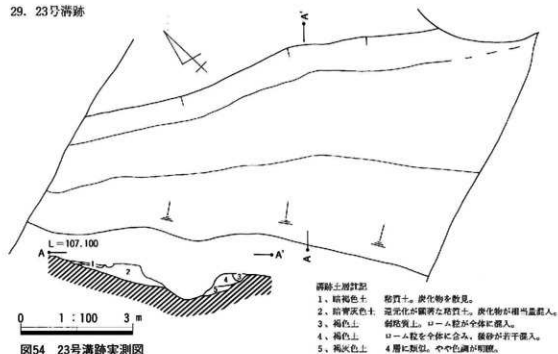


図54 23号溝跡実測図

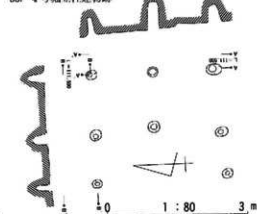
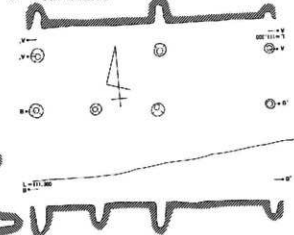
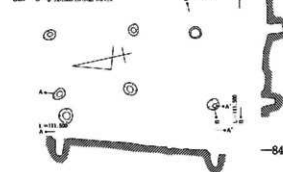
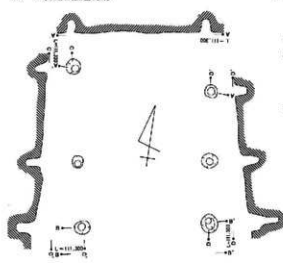


図55 掘立柱建物跡実測図(1)

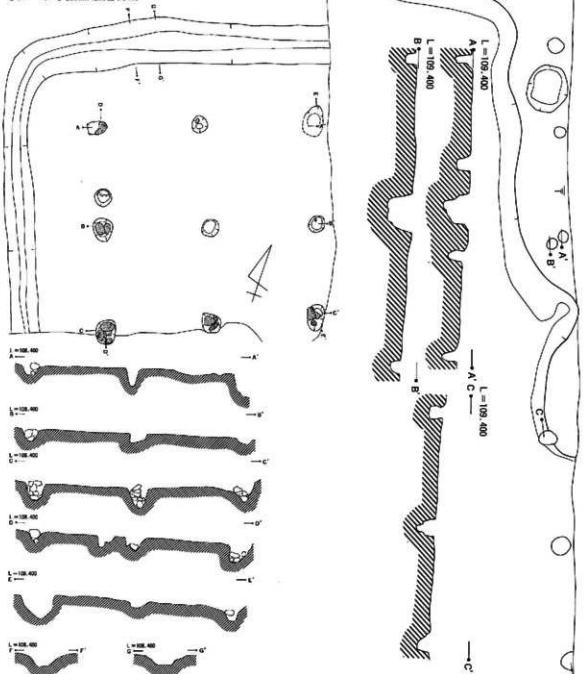
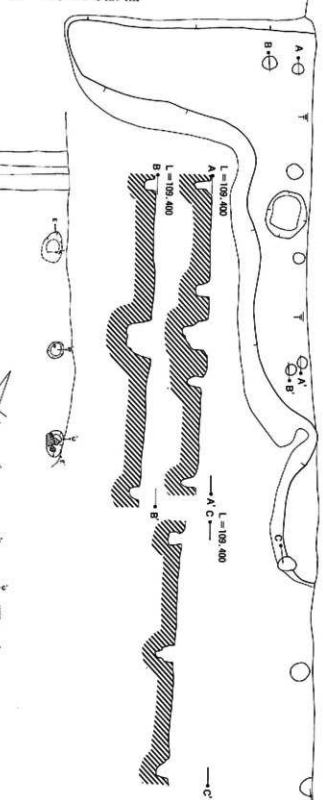


図56 掘立柱建物跡実測図(2)

図57 掘立柱建物跡実測図



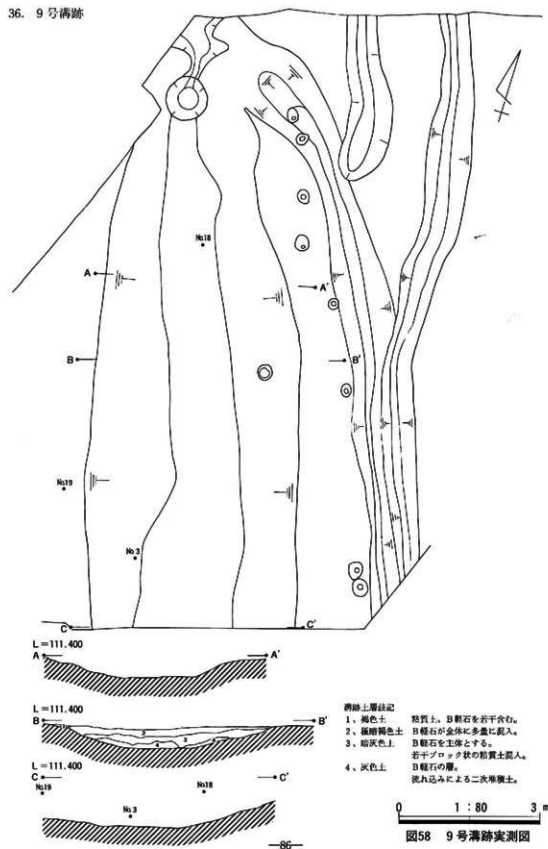


図58 9号溝跡実測図

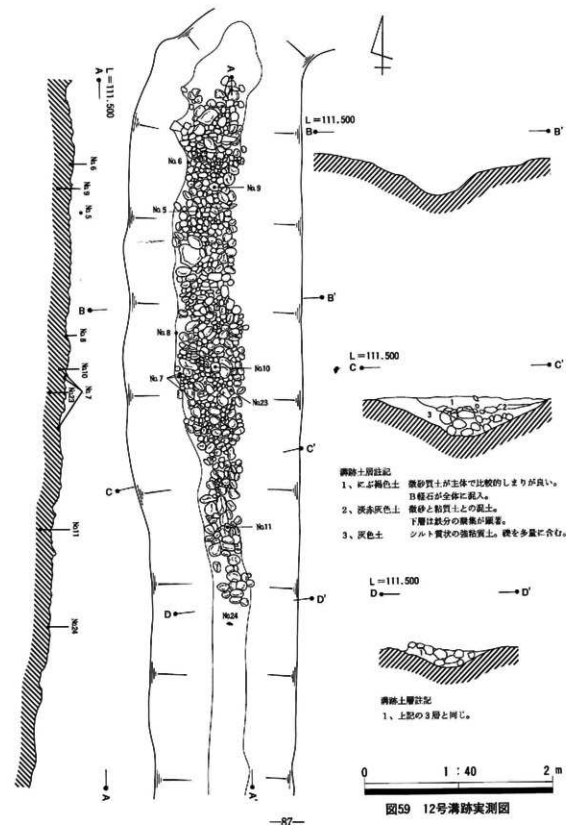


図59 12号溝跡実測図

38. 32号堀跡

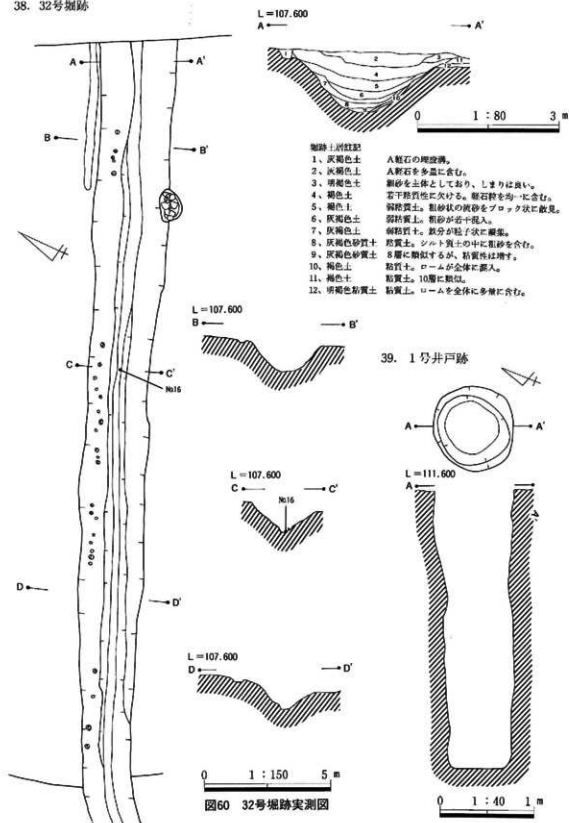


図60 32号堀跡実測図

39. 1号井戸跡



図61 1号井戸跡実測図

40. 2号井戸跡

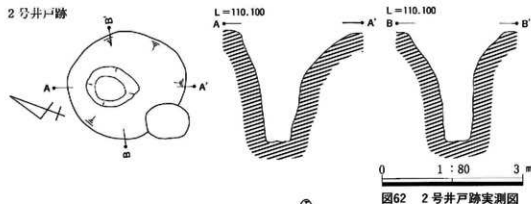


図62 2号井戸跡実測図

71. 1号礎石建物跡

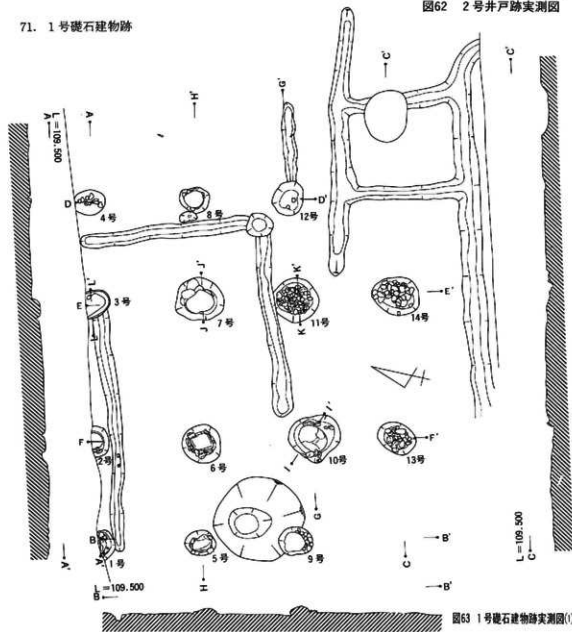


図63 1号礎石建物跡実測図(1)